

『トンビにアブラゲ』

- 一 将軍家光に会った (二二)
- 二 双曲円錐体状スパイラル理論 (十二)
- 三 長屋の連中が空を飛んだ (三十三)
- 四 江戸の夏 (四十三)
- 五 徒侍弘兵衛が来た (五十二)
- 六 三人は、おむすびを作った (七十)
- 七 お釈迦様は素敵なお方 (八十五)

一 將軍家光に会った

ここは東京。西暦二〇××年。

茶パツのうら若い看護師さん、毎日、元気に仕事をこなしております。彼女の名前は綾。明るい性格ですから患者からは好感をもたれています。が、今どきの女性ですから全く遠慮がありません。手術したばかりのお年寄りにも、

「あらー、この注射、チョー痛そう。おじーチャン、我慢できないかもしんなーい。そんなー、痛くしないでなんて言ったって……。針で刺すんだから、痛いに決まってるじゃん。男は、マンガマンガ！ えっ、何言ってるか判んないのー。もー、やんなっちゃうー。我慢、我慢って言ってるの。そんな情けない顔しないの！ おチンチン持つてんでしょ。えっ、もう使いないモンにならないって。ヤーだ、乙女の前でそんな恥ずかしいこと言わないで」

なんて言いながら、おじーチャンの肩を思いっきり叩いたりする。おじーチャン、目を白黒させている。

自分から変な事を喋っておきながら、急に乙女になっちゃうお調子の良さも、お年寄りから見れば可愛いもの。真面目すぎる看護師に比べれば気が明るくなるものであります。

こんな彼女の唯一の楽しみがハング・グライダー。風に乗ってスーイツ、スーイツと空の散歩。大自然に身をまかせるのが大好き。

—— あー、イーなー！ まるで私はトンビ。ピーヒヨロロ！ ピーヒヨロロー

なんとも呑気なものです。

—— このまま、どっか遠くの世界に行っちゃいたいなー！ ピーヒヨ

ロー！

その時、突然、周りが真っ白になり光の渦に包まれます。

「あーッ！！！」

ここは江戸。寛永×年。

ご隠居さん、今日も近所の寺での法要に行つてまいりまして、お清めのお酒でちよつと帰りが遅くなつてしまいました。

—— どうも、あの坊主と喋つていと帰りが遅くなる。バーさんが生きてたら怒られるね。また、あのボーズと呑んだのっ！ いい加減にしないさい！ はたで見ると、まるでユデ蛸と二十日大根じゃない。あんたのチョン髷なんか大根のしっぽだからね。ちよこつとしかないんだから。真っ赤な顔してサー。おでんのタネにもなりやしない。こんな大根、気持悪くて食べる気もしないよ。どうせ食べたつてトウが経つちやつて美味しくも何ともないんだから……なんてね。テメーの方が、よっぽどトウが経つたけど、いないと寂しいねえ。

ブツブツ独り言を言いながら歩いておりますと、夜中だと言うのに急に空がバツと明るくなります。

—— な、なんだ。雷様かっ？ しかし、ゴロゴロがなかったね。

それと同時に、ドサツと音がいたします。

—— 何かが落ちたよ。やはり雷様かい？ な、何だい、あれは？ 狐か狸……？ いや人間かねえ？ 頭が丸くて光つてる。まさか……あの坊主じゃないだろうね。いやいや坊主の頭じゃない。赤くない。ギョッギョッ！ 目が飛び出ている。あの着物も変だね。筒袖だよ。しかも股引のままだ。

そこに倒れていたのは綾であります。ご隠居、恐る恐る近づいていきます。見れば、どうも人間のようにあります。

—— うーん、落ちちゃったみたい。でも風はちゃんとしてたし……変ね。なんだか急に周りが真っ白になって光ったみたいだけど、どうなっちゃたの？

綾が、キヨロキヨロと辺りを見渡していると、赤い顔をした老人が近付いてきました。

「これこれ、どうしたのじゃ。そんな所で寝ていると風邪をひくぞ。しかし、おぬしの頭は大きいのう」

この老人、変なところに感心しています。

「あらっ、はじめまして。でも、おじーちゃん、随分洒落た着物着てるわね。それに、ちよん髷なんかつけて。どうしたの？ アッ、判った！ 仮装行列の帰りだ」

「何を申しておるのだ。これが普段の格好だ。おぬしは頭は大きいし目は出ているが……何か病気でもしたのか。不憫じやのう」

「あつ、これのこと。なに言ってるのよ、馬鹿みたい。ヘルメットとゴーグルよ。今、取るわ」

綾がヘルメットとゴーグルを取りますと、ご隠居、ビックリ仰天。頭が取れたのかと勘違い。

「ご、ごーぐる……？ それに……へるめつと。何だそれは？ それに何なんじゃ、おぬしの髪の毛は茶色ではないか。だが……どうも、おぬしは女のようなだが……。うーん、判った。女狐が化けて出たのじゃナ。わしに何をしようと言うのじゃ。わしをダメしても、何も出ぬぞ」

「やーだ、何をくだらない事を言ってるのよ。人間、わたしは人間。狐なんかじゃないわ。この茶パツはね、今、流行ってるの。みんな染めてるわ」

「流行っているだと、わしは初めて見るぞ。どこで流行っているのじゃ」
「どこって、どこでも茶パツよ。そうね東京なら、どこ行ってもウジャウジャいるわ」

「東京？ それは、どこじゃ」

「やーだ！ 東京、知らないの。日本の首都じゃない。日本人なら知らな

い訳ないわ。アツタマ、おかしいんじゃない。それに、この辺、やたら暗いわね。ここは何処？」

「おぬしこそ頭が変なのではないか。ここは江戸じゃ。徳川様のお城があるところじゃ」

「江戸ッ！ 徳川様ッ！ ま、まさか……」

半信半疑で、とりあえず聞いてみる事にしました。

「じゃー、今の將軍は、誰？」

「何を言うかっ！ 徳川家三代將軍、家光公ではないか」

綾、なんとなく不安になってきます。もう少し訊いてみることにします。

「ところで……おじーちゃん、明治時代って知ってる？」

「そんなものは聞いたことがない。妙な事を言うものではない。そうか、おぬし、頭を打ったのであろう。それとも、本当に狐か？」

「おじーちゃん、狐は止めてよ」

酔っているようだが、この老人、顔付きは真剣そのもの。

「ま、頭を打ったか疲れておるのであろう。一晩眠れば元に戻る。私の家で休みなさい」

どうも夢ではなさそうです。

—— 話には聞いたことがあるけど……、まさか……

綾は、タイムスリップに遭遇したのだとは思いますが。

—— どうしよう。もし、本当だったら……。家光……。ウツン……。どうしよう……

「何じゃ、その竹棒のようなものと布は？」

どうせ説明しても無駄だと思い、

「これはね、物干し竿と天幕。干してる最中に風と一緒に飛ばされちゃったらしいの」

「おー、そうか。わしも持ってあげよう」

綾は複雑な気持ちでしたが、どうやら気の良いお爺ちゃんのようなです。

—— 何かの間違え……一晩経てば元に戻っているかも知れない。

綾は、ご厄介になることにしました。

その夜は、ご隠居の長屋でグツスリ。

翌朝、目が覚めてみますと、やはり夢ではないようです。ご隠居がいます。

—— 昨日と同じ……

綾は頬つぺたを抓つかってみます。

—— 痛い……。此処は、江戸なんだ……

綾は気を取り直します。

—— 仕方ないわ。人生なんて、成るようにしか成らないんだし……

「オハーツ！ 外は明るいね。今日は良い天気」

「おー、目が覚めたか。グツスリと眠っておったぞ。寝顔を見ると狐ではなさそうじゃった。何か訳があるのじゃろう。朝飯の後、話してくれぬか」

ご飯、味噌汁、目刺し。食べてみると思いのほか美味しい。

「そうか、驚く話じゃのう。そう言うことも世の中にはあるんじゃないかな。そなたも驚いたであろう。タイム何とか…… わしには良く判らんが遠慮はいらぬ。当分ここで寝起きすれば良い。また何かが起こって元に戻れるかも知れぬ」

ご隠居、目の前にいる茶パツの娘は歴とした人間でありますので、素直に話を信じる事にいたしました。

驚いたのは長屋の連中です。

「おい、見たか。ご隠居のところは女だ」

「いや女狐の生まれ変わりだ。しかし、イー女に生まれ変わったもんだな」

ワイワイ、ガヤガヤ。長屋中が大変な騒ぎ。女房連中は眉をひそめて、「やだねったら、やだねー。なにもおカミさんが死んだからって、あんな女狐を連れてこなくなつて……」

などご隠居を不思議がりますが、ご隠居は何処吹く風。別に気にいたしません。

「ねー、いつも目刺しにご飯じゃ飽きちゃうわ。この辺にコンビニないの?」

「たまには、コーヒーとパンがいいわ」

「テレビないの。衛星放送でイチローが見たい」

何を言われても、ご隠居は驚きません。所詮、タイムスリップとかいう訳の判らない事態。自分は経験できない事と悟っております。綾の話には理解できない言葉が沢山出てきますが、ニコニコと笑って聞いています。こう言うところが、ご隠居さんの偉いところ。

時間が経つにつれ、綾は長屋の連中とも顔を会わせる機会も多くなり、打ち解けてきます。

「ねー、名前がないのも変でしょう。悪いけど、狐子きつねこって名前にしようって皆で決めたの」

綾は江戸時代にタイムスリップしてしまったと覚悟しています。現代に戻れるかどうかは判りません。だったら、周りの人と仲良くした方が良いのかな、などと考え初めています。

「いーわよ。じゃ、狐子ね。よろしく」

ってんで、ますます連中と仲良くなっていきます。

もともと看護師ですから子供が腕を折ったと言われれば、添え木をしてサランで巻いてやる。三角巾を作ってやる。蚊が多くてと言われれば、溜池に油を撒き、ボウフラを退治してやる。そんなこんなで、段々と評判が

高くなっていきました。

しかし、好きなものは好きでありまして、どうにも空を飛ばないとストレスが溜まります。

「ご隠居、話があるの」

「ご隠居は、もう我が孫のつもりで可愛くてしょうがない。とは言え、

「他の者が言うのは構わんが、そのご隠居は止めておくれ。なにか別の呼び方にしておくれよ」

「いいじゃん」

「ご隠居、ムツツリしています。

「もうー、どうしてもイヤなの。じゃー、おじん」

「何じゃ、それは。よく判らん」

「ジージャじゃ変だし。じっちゃま、にしようつと」

何となく良い響きであります。

「うん、それであれば良いな」

「ところで、じっちゃま、物干し竿と天幕、使いたいんだけど……」

「どうするのじゃ」

「空を飛ばしたいの」

「空を飛ばつ！ そうか、空を飛んでる最中に、たいむすりつぶ、したんじゃったな。そんなに飛ばりたいのか？」

「飛ばたい！」

近くの小高い丘に登りまして、風を待ち、ハング・グライダーでフワリ。気持ちがいい事おびたらしい。なにしろ当時の江戸ですから、自然は、そのまま。狐子、いや、綾は嬉しくてしょうがない。

こうなりますと、空を飛ば回数が増えてまいります。成り行き上、飛んでる姿を見る連中も増えてきます。

「やはり、あの大トンビは狐子だつてよ」

「やっぱり狐子は狐の生まれ変わりだよ。さもなきや、空なんて飛べる訳

ないよ」

そして江戸中に噂が広がっていきます。

噂は江戸城にも届きます。

征夷大將軍、徳川家光の耳にも……

「三太夫！ 三太夫は、おらんか！」

お側役の三太夫、ご隠居に負けず劣らずの皺くちな顔でイソイソと参ります。

「ハ、ハー、何か御用でござりまするか」

「用があるから呼んだ」

「呼ばれたから来た」

「三太夫、つまらん落語の節回しを言うではない」

「へ、へー」

「ところで、狐がトンビになり空を飛んでるらしいが、その方、知ってるか」

「殿っ、そのような下賤な噂、お聞きめさるな。噂でございます。私めも存じません」

「何を申すか三太夫。噂であれば、なおさら確かめねばならぬ」

「仰せではございますが、下賤な噂に耳を傾けるとは天下のご政道に閑わります」

「天下の將軍たる者は、総てを知っておかねばならぬ。狐トンビを連れて参れ！」

「恐れながら、狐トンビと申されましたもトンビのようなものに狐がつかまり、空を飛ぶのでありまして、連れて参るとすれば狐だけになります」

「なんじや、そなた知っているではないか。存ぜぬと申したくせに……」

「ハ、ハーッ、恐れ入ります。実は、何度か見に行ったことがございます。まさに大トンビのごとき姿で空を飛んでおりました。狐ではなく、狐子と

呼ばれし、うら若き女でございます」

「なに！　うら若き女とな。三太夫、すぐに連れて参れ！」

三太夫、家光の性格を良く知っております。なんにでも興味を持ち、自分で確かめなければ気が済まない性格。三太夫とて噂の主には会ってみたいと思っております。早速、駕籠を仕立てて長屋に向かいます。

「〔隠居、殿のお申し付けだ。狐子を参上させてくれぬか〕

「三太夫様、いたし方ございませぬな。殿のお申し付けであれば……」

〔隠居と綾、ハング・グライダーを持ってお城へ。当時の江戸城には、まだ立派な天守閣がそびえております。綾は、その威容に目を輝かせながら本丸へ。〕

「苦しゆうない。近こう寄れ。その方がキツネ、いや狐子か。持参したそれがトンビか。して、空を飛べるのか」

看護師さんは、いざと言う時には度胸がすわるものであります。

ニコツと笑った綾、

「家光っちゃん」

と言った。これを聞いた三太夫はビックリ。

「これこれ、征夷大將軍に対し、なんと言うことを申す。打ち首ものぞ！」

「三太夫、捨て置き。構わぬ。どのように申しても構わん。どうなのだ、飛べるのか？」

「もちー、大空を飛んじやうよ」

「もちー？　まあ、良い。そのトンビが曲者であろう」

「トンビ、トンビって言うけど、これはハング・グライダーって言うんだけどさー」

「さー？　まあ、良い。ところで、そのハングとやらを使えば誰でも飛べるのか？」

これを聞いた三太夫、

——　しまった、口裏を合わせておけば良かった。

と思つたが後の祭り。

「簡単よ。二、三度トレーニングを遣れば、バッチシ！」

「バッチシ？ 何じゃ、それは。まー、良い。ところで三太夫、トレーニングとは何だ？」

「殿っ！ これは狐社会の言葉でありまして、恐ろしき事にございます」

「恐ろしき事とな。構わぬ、話せ」

「ハハハッ、では驚きませぬようお聞きください。ウオホン。まず、ニングとは男の一物の事であります。ニングをトレ、つまり男の一物を取れと申しております」

三太夫、家光が自分も飛びたいなどと言い出しかねないので、勝手な事を言います。飛びたいなどと言い出されるのではないかと、心配ではないのであります。

ところが綾は、そんな事は知りません。

「やーだ、三太夫！」

呼び付けにされた三太夫、ビックリして顔をしかめています。自分の事を様や殿を付けずに呼ぶのは家光だけ。目を白黒させています。綾は、そんなことにはお構いなし。

「家光つちゃん。トレーニングって練習の事よ。君も練習すれば飛べるよ」家光、大喜び。三太夫、真っ青。

「狐子殿、余の願いを聞いてはくれまいか」

なんとなく立場が替わってしまいます。

「イイヨ！ 言つてごらん」

「天守閣から飛んでもらえませぬか」

皆は長い廊下を歩き、天守閣に行きます。今度は何段もの階段を昇って最上階の天守に。

綾は準備を始めますが、家光は先程からヘルメットやゴーグルに触りたくてウズウズしてます。そーっとヘルメットに手を……

「駄目ツ！ 触っちゃー！」

なんと綾が家光の手をピシヤリ。三太夫、腰が抜けんばかりに驚きます。しかし、家光は済みませんと言う顔をして手を引つ込めます。三太夫は、これから何が起きても気にしないことにします。

準備完了。綾は天守閣の廻廊かいろうから大空へ。

「三太夫、飛んでおる、飛んでおるぞ。大空じゃ。大空。飛びたいのう。大空を飛んでみたいのう」

三太夫、家光が苦勞して將軍になったのを知っていますので、この素直な気持は十分過ぎる程判ります。

「殿っ！」

言葉が出ません。

その時、天空に眩い光が……

「オッ！ 三太夫、狐子が消えたぞ。どうしたのだ」

三太夫、訳が判りません。

「三太夫。狐子呼び戻せ！」

三太夫、ご隠居に、

「ご隠居、どうなったのだ。何とかしてくれぬか」

ご隠居には、狐子が元の世界に戻ったことが判りましたが、何も言えません。

「三太夫、隠居。どうしたのだ狐子は？」

二人とも押し黙り、平伏するのみでございます。

「隠居、そなたであれば判るであろう。教えてくれ。どうすれば狐子を呼び戻せるのか」

ご隠居、何も言えません。

「うーん、何か深い訳がありそうじゃな、どうなのだ、ご隠居……」

家光に、ご隠居と言われてもただ平伏するのみ。

「どうやら戻って来てはくれぬようじゃな。残念じゃな。空を飛びたかった。目の前から消えてしまった。まるで、トンビにアブラゲを取られたようだな。それに狐子。狐だけに、もう戻ってはコンカ」

家光、どうにも締まならい駄洒落を言っております。

二 双曲円錐体状スパイラル理論

「あれっ、綾じゃない？ 綾よ。ねー、みんなー、綾が戻ってきたわよー」
病院中が大騒ぎになります。綾が行方不明になったのは一年ほど前のことです。事件に巻き込まれたのではないか、誘拐されて外国に連れて行かれたのではないか。警察は躍起になって捜索。報道機関は、全国に顔写真を放映して情報を求めましたが、全く手掛かりはありませんでした。

その綾が、ひょっこり戻ってきたのです。

綾は警察で事情聴取を受けましたが、じっちゃまや家光たちの事など話せません。それにタイムスリップ経験者なんて事になれば世間が黙っていません。そこで、風に流されて見知らぬ島に不時着。そこで一年間過ごした事にいたしました。不審がる人も居ましたが、警察でも本人が無事に戻り、しかも別に被害を受けた様子も有りませんので事を大袈裟にたくはありません。報道機関も本人から、これと言った話が聞ける訳でもありませんので興味を失ってしまいます。

綾は嬉しい事に一年前と同じ状態で病院に復帰することができました。明るい性格はそのままです。相変わらず、どの患者からも気に入られています。髪の毛は一年の間で普通の黒髪に戻っています。ただ、以前と比べ、ふっと物思いに耽かへるようになっていました。そして、もの静かな女性の雰囲気を持つようになりました。

—— じつちやまや家光っちゃん、三太夫たちはどうしてるのかな。それに長屋の連中。会いたいなー。

そう簡単にタイムスリップなど出来るわけがありません。仕事はきちんと遣っています、休みの日などは部屋で空を見上げ、遠くを見つめる事が多くなりました。

同僚たちは心配で仕方ありません。

「ねー、綾っ。どうしたのよ。前みたいにおしやべりしよーよ。そんな風にポーッとしてるなんて綾らしくないわ。島の話もしてくれないし。一年間、何やってたのよ」

「うーん、何もない所だったし……。ただね……」

「ただね、って何よっ！ まるで好きな人の事でも思い出してるみたいよ」

「好きな人？ そんなんじゃないわ……」

綾は、楽しかった一年間の話をしたくて仕方がありません。でも、できません。やはり頭に浮かぶのは向こうの事ばかりです。

—— じつちやまは判ってくれてたから良いけど、家光っちゃんや三太夫、長屋の人達は心配してるだろうな。狐子なんて変な名前。でも会いたいなー。

一方、あちら側。

「三太夫っ！ 三太夫は居らんかっ！」

「へへー。お呼びになりましたでございませるか？」

「呼ばれたから来たのであるう。いちいち呼ばれたかどうか、確認せんでもよい！」

「ははーっ。恐れ入ります。ところで、なんぞ、ご用でございませるか」

「用があるから呼んだ……」

「呼ばれたから……」

何となく相変わらざるの二人であります。

最近、家光は機嫌が悪うございます。三太夫も触らぬ神にたたりなしと余り近寄りません。三太夫は家光の子供の頃からのお側役ですので、機嫌の悪い理由についてはうすうす感じております。

「三太夫、既に……随分と時が経ったな」

「はっ？ 何に関する時が過ぎたのでございますか」

三太夫は判っておりますがとぼけます。家光も何度も同じことを言っておりますので、やはりバツが悪く、強く言えません。

「何がと改めて聞くものではない。時が過ぎたと言えれば判るであろう。何年、余の側に居るのじゃっ！」

上司というものは都合が悪くなると、今まで何年一緒に遣ってきたのだ、それぐらい判るだろうと言ひ、内容を確認せず物事を進めると判ったつもりで勝手な事をするものではない、と言ひます。まことに自分勝手なもの。これは今も昔も同じでございます。

「殿、恐れ多くも申し上げますが、例の件でしたら三太夫めは何も存じませぬ」

「例の件となっ！ なんじゃ、その例の件とは。ハッキリ申せ！ はっきりものを申さぬとは……武士の風上にも置けん。申せっ！」

家光は、自分から言うのは何か体裁が悪いと思っております。三太夫から言つて欲しいのですが、三太夫、そんなことは百も承知。しかし、そこは古狸。顔つきを変え、根性をこめて話だします。

「例の件でお判りにならないとは情けなく存知ます。この三太夫、ご幼少のみぎりからお側にお仕えし既に二十数年。身を粉にして励んできたつもりでございます。全国に数多いご家臣の中で、この三太夫を置いて他に殿のオシメを取り替えたものは居りませうか。三太夫め、だげにござります。そこまで心を込めてお仕えした三太夫に対し、武士の恥とはあー、情けない。これでは、ご神君に申し訳が立ちませぬ。三太夫めは腹

長屋の女房たちは三太夫をいたわっているようですが、次がいけない。「あの業突く張りが、そう簡単にくたばる訳ないわよっ」

そんな話をしておりますと、お駕籠が参ります。中から三太夫が、よっからしよと出てまいります。

「あーら、三太夫様、お久しぶりです。近ごろお見えにならないので、皆でお体の具合でもお悪いのかなどと心配していたのでございますよ。お元氣そうでホツといたしました」

ガラツと態度が変わります。

「ご隠居はおるか？」

「えー、いらっしやいますよ。さーどうぞ」

ご隠居も綾がいなくなり、閑を持って余しております。三太夫が来るのが嬉しくて仕方がないのでございます。

「三太夫殿、粗茶ですが……」

「ご隠居、普通はな、良い茶を出す時に謙遜で粗茶と言うのだぞ。この茶は、あえて言わずとも粗茶ではないか。せめて普通のお茶はないのか」

ご隠居、いかめしい顔になり、

「これは異なことを。粗茶なればこそ粗茶と申したまで。粗茶を粗茶と申してどこに偽りがございましょうか。痩せても枯れても、このアツシ、宮大工の棟梁としてこの界限の神社仏閣、総てを手掛けた男にごぜーます。何、知らねー。知らざー言つて聞かせやしよう。いなせなデークの八五郎たー、アツシのことでアリンズ」

なんとも締まらない啖呵を切っております。

「ご隠居、その最後のアリンズは変ではないか」

「イヤー、お恥ずかしい次第。久しぶりに啖呵を斬ったものですから口が滑ってしまいました。ところで、三太夫殿、また殿ですか？」

「そうじゃ。又じゃ。困ったのー」

三太夫、ご隠居と一緒にいる時は楽しいのですが、家光に報告する時の事を考えますと憂鬱になってしまいます。何の便りもござりませんでした。

家光のガツカリする姿が目には浮かんでしまします。

「三太夫殿、殿は何故これほどまで狐子のことを気にするのでしょうか」
「おぬしには判らぬのか。皺くちやなのは顔だけでなく、頭の中も皺くちやにボケて参ったのではないか」

「これまた面妖な。いなせな八五郎。泣かせた女は数知れず。この八五郎が判らぬ訳はございません。殿とて男。しかし、お城には綺麗なお女中が大勢いると聞いておりますが、何故にまた狐子に？」

「そこじやよ、ご隠居。茶パツとか申す、あの髪の色はお気に召してはおらんのだやが、物怖じせぬところが気に入ったようなのだや。周りにいるものは皆、將軍を意識し、何も申さん。それはそれで良いのだやが、殿は狐子のような女子おなごを生まれて初めて知ったのだや。それはそうじやろー。天下の大將軍に対し、家光つちやんと申したのは狐子だけじやからな。ついでに、わしのことを三太夫と呼びつけにしおった。わしもビックリしたが、不思議と怒りは湧いてこなかった。殿は、狐子に新鮮な驚きと興味を持たれたと、わしは見えておる」

ま、男と女は、周りからは理解できないものでございます。凛々しく見栄えのする男に、もう塗りなおしが利かない程、如何ともし難い顔つきの女がくつついているかと思えば、絶世の美人の横に、これ以上崩し様がないう程どうしようもない顔付きの男が居る。男と女の関係は正に奇妙なもの。いや失礼しました。例えが悪かったようでございます。綾は、きりつとした美しい顔をしていますし頭も良い。と言うことは家光がおかしいのか。これまた違います。徳川三代將軍として、一六二三年から五十一まで、四十八歳で亡くなるまで、諸法度の制定や参勤交代の制度、また世界に余り例の無い鎖国を敷いたのでございます。以後二百年に亘る徳川体制の礎を築いた名君であります。

ご隠居は、何百年も先の世界から来た女子に興味を持たれるとは、殿も

困ったものじやとは思うものの、家光はそんな事情は知りません。三太夫に総てを話し、もうお考えなさらないようにと殿に伝えてもらいたいと思いますますがやはり話せません。三太夫は粗茶を飲み、ため息をつくばかり。

綾は相変わらず。非番の時には遠くをポーツと眺めています。

同僚たちは気になっていますが、どうしようもありません。

ある晴れた日、綾は、久しぶりにハング・グライダーを持って表に出ました。

—— まさか？ でも……同じように飛べば……

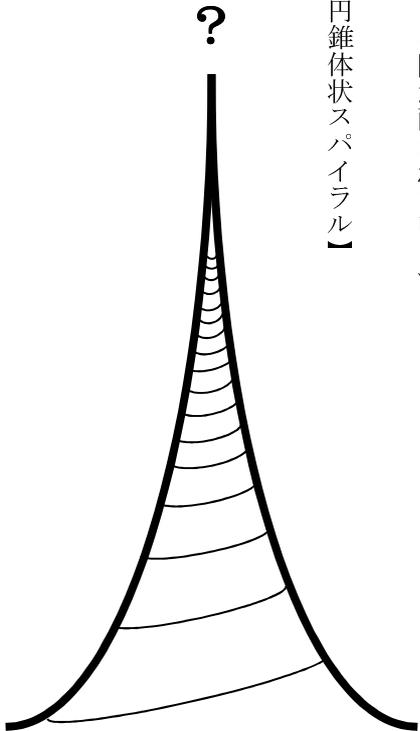
との思いに駆られたためであります。同じ場所で同じように飛んでみますが、全く変化はありません。

次の休みの日も、その次の日も……。何度飛んでも変化はありません。

—— そうよね、タイムスリップなんて、そう度々は起こらないわ。私って馬鹿みたい。綾は飛ぶのを止めてしまいます。静かな淑やかな女性へと変わっていきます。

かれこれ一年ほど経ったでしょうか、綾は、古本屋でふと不思議な本を手に入れます。本の名前は、「双曲円錐体状スパイラル理論」
次のような図が画かれています。

【双曲円錐体状スパイラル】



『地球上で営まれる歴史は、この図のようにモデル化できる。この双曲円錐体の上をスパイラル状に上へと向かって行く線が歴史である。円錐体を輪切りにした半径は徐々に小さくなっていく。これは、地球上の変化のスピードが年とともに早くなっていく事を示している。地球は、誕生から死まで約百億年。十八世紀は、地球年齢で言えば四十六億歳。太陽の膨張により地球の残りの寿命は約五十億年。頂点の？は、地球の死を意味している』

出版された年は、千七百七十七年。

——へえ、地球って太陽に呑み込まれちゃうんだ。でも、それは五十億年後。どう考えても私には関係ないわ。

先程から、古本屋の主人が優しくジーツと綾を見つめています。

「お嬢様、長い立ち読みは余り美しくはございませんよ。そんなにその本がお気に召したのであれば差し上げますよ」

「あらっ、ごめんなさい。でも……お嬢様なんて言われたの初めて。ふふ、気分イイー！ そうね、買おうかしら。お幾ら？」

「お代はいりませんよ。この本はフランスで書かれたものなんです。翻訳したのは私の先祖でこの店の十代前の主人です。結局この本は売れなかった訳ですが……。この店には言い伝えがありましてね。最初にこの本を手にした人に進呈すると言うものです。つまり二百年近くも手にした人が居なかったことになります。お嬢様が初めてです。私も言い伝えを守らなければなりません。どうぞお持ちください」

なんとなく不思議な気持で本を受け取り、部屋で読みはじめます。

読み進めていきますと、妙な文章が目に残ります。

『このスパイラルと円錐体の稜線との接点は同時性を持っている。つまり、

これらの接点間では、時としてタイムスリップの形で生物の行き来が行われる事がある。過去へ、そして未来へとタイムスリップする可能性が高い。仮に、人間がタイムスリップした場合、どのような事態が発生したとしても、その時代の流れを変えることにはならない。単に不思議な出来事があったと記憶に残るだけである。但し、五十億年先にタイムスリップした場合、地球と運命を共にすることになる』

—— ヤダー、死んじゃうんじゃない。私、良かったわ。五十億年後にタイムスリップしていたら、こうしていられなかったもん。待ってよ、と言うことは家光っちゃんの時代と同時性があるんだっ！ じゃー、また行けるんじゃないかな。家光っちゃんは二十三歳って言ってたけど……

計算をしますと三百八十年前にタイムスリップしたことになります。しかし、どうすればタイムスリップできるかについては、何遍読み返しても書いてありません。

—— 上手く行かないな。可能性が高いことは判ったけど、結局、方法が書いてないんだもん。どうしようかなー。

綾は、古びた本を枕に、いつしか眠ってしまいます。

夢の中に、この前、ハング・グライダーで飛んだ姿が浮かんできます。

『あー、イーな！ まるで私はトンビ。ピーヒョロロ！ ピーヒョロロ』

綾は飛び起きます。まさか？ まさか……？

「三太夫っ！ 三太夫は居らんかつ！ 三太夫め、あの長屋に行くと呼びが遅い。何をしてるんだっ！」

家光は着々と幕藩体制を整えていきます。政には問題ありません。しかし、心は空虚。余り狐子のことを言いますので三太夫は近ごろ気軽に話し

掛けてくれません。

「殿、遅くなってしまいました。ご容赦くださりませ」

「うん、ま、良いであろう。して、如何であった遠慮なく申してみよ」

「殿、何遍訪れても同じでござります。お陰で長屋の連中とは心打ち解ける関係になり、庶民の生活、考えを知ることが出来ましたが……」

「そうか。庶民の生活を守るのも將軍としての勤め。どのような生活、考えを持っているか老中たちに伝えておけ。三太夫、どうにかならんか」

「はっ、何をどうするのでございますか？」

「もう良い。同じ事の繰り返しじゃ。どうせ、そちは最後に萎びた腹を出す事になる」

「ははーっ。恐れ入りまする」

綾は病院に辞表を出します。皆、驚きます。

「ねえ、どうして？」

「それで……どうするの？」

「家族は何て言ってるの？」

「あの島のこと忘れられないの。また行ってこようかと思って。今度は、ちよつと長くなると思うけど……。両親は好きにして良いって言ってくれるの」

綾には確信がありました。必ず行ける。必ず……

身一つでハング・グライダーに乗ります。

同じ空です。思い切って言葉を発します。

『ピーヒョロロ！ ピーヒョロロ！』

ご隠居、今夜もまた例の坊主のところでお酒。フラフラした足取りで長屋に向かいます。

—— まったくあの坊主には困ったものだ。何かと言うと呼び出す。そりや、こっちだつて酒は好きだよ。婆さんは、もう居ないから家にいたつてつまらないし、狐子も居ない。でも、こやしよっちゅうでは堪らんよ。^{ヒト}爺が二人、グチャグチャ喋り合つたつて、この国の未来が開ける訳でもあるまいに。しかし、良い酒だつたな。あーいう酒なら毎日でも良いね。坊主め、明日も呼びに来ないかねー。

空が、パツと明るく光ります。

ドサツ！

この前と同じであります。

「まさかつ？ まさか狐子が……」

草むらで何かがゴソゴソ動いています。

「ヤツパリ落つちた時は腰が痛いな。練習が必要ね」

ご隠居、喜んで良いのか驚いて良いのか…… 口をただアングリ開けて
呆然。

「じっちゃま、お久しぶりー！」

早速、長屋へ。

長屋の連中も大騒ぎ。狐子が戻ってきた！ 狐子が戻ってきた。呑めや歌えやで盆と正月がいつべんに来たような雰囲気。誰かが狐子に喋らせろと怒鳴ります。

ご隠居が二十日大根のように顔を真っ赤にして場を取り仕切ります。

「ええー、本日はお日柄も良く、また皆様におかれましては、ご健勝のご様子。誠に悦ばしい限りでございます。この八五郎、長くこの世にお世話になっておりますが……」

「ご隠居っ！ ご隠居に喋ってほしいんじゃねえんだ！ 狐子だよ、狐子っ！」

「いや、これまた失礼をっ！ では狐子様のご登場でございます。皆様、

拍手でお迎えくださいっ！」

まるで歌謡ショウの司会者であります。

「ただいまっ！ 私も嬉しいの。本当に嬉しいの。実はね、私の名前は、綾って言うの。髪の毛の色もこれが本当の色。今度は、ちよつと長く居たいのっ！ 皆さん宜しくっ！」

もう大変であります。長屋の連中はドンチャン騒ぎ。

そんな中、急に外が騒がしくなります。何が起こったのだろうと皆が外を見ます。そこには何と三太夫を連れた、あの家光であります。天下の大將軍が長屋にお越し。皆、口をつむりダンマリ。どうして良いか判らないのであります。

それはそうでしょう、天下は徳川家が治めています。家光は、その頂点にいるお人でございます。市井のこんな長屋に顔を出す事など考えられない事であります。連中、立っついて良いのか平伏すべきかも判りません。

家光が口を開きます。

「苦しゆう……、いや、そのままが良い。そのまま。ご隠居はどこじゃ」

「へへっ」

「ご隠居、驚いたであろう。三太夫は止めると言った。余もご隠居には済まぬと思つたが、見張りをおいたのじゃ。許せ。必ず戻つて来ると思つておつたのじゃ。ところで狐子は？」

綾が、ひよこんと部屋から出てまいります。

「お久しぶりー、家光ちゃん！ 元気だったー！ 三太夫も元気そうね。じつちやまが、しよつちゆう来るつて言つてたけど、家光ちゃんのお世話、大変だったでしょう。ごめんね」

長屋の連中は、ど肝を抜かれるほどビックリいたします。中にはお手打ちに合うと思ひ、早くもナンマイダー、南無妙法蓮華経ーと唱えだします。これも当然のことであります。

ところが家光、まるで気にせず平気な顔。

「おー、狐子。会いたかつたぞっ！ どうしておつた。なんだ黒髪ではな

いか。その方が良い、その方が良い。顔を見せてくれぬか……」

今度は、ピヨコンと一歩、前に出ます。

「やつと会えたな。おつ、綺麗になったではないか」

「なによ！　じゃー、前は綺麗じゃなかったって言うの。そんな言い方するようじゃダメツ！　前よりも綺麗になったって言わなくちゃ」

「済まぬ、済まぬ。そうであった。狐子、前よりも綺麗になったぞ。これで良いのか」

「そうね、勘弁してあげるー！」

落ちていてニコニコ聞いているのは、ご隠居と三太夫だけ。長屋の連中は顔を見合わせるばかり。ポカーンと口を開け涎を流している者もいる始末。お顔を見てもいけない、ましてや話をするなど有り得ない事。人生観、生きる縁よすが　がもんどりうって崩れ去るようであります。やつと何人かがコソコソ話し出します。

「おいっ、どうなっちゃってるの？　あの人、家光公だよね」

「あたしだってお顔を見たことなんてないもん。判んないよ」

「ご隠居はお城で会ってるから、やっぱり本物なんじゃないの」

「でも綾つて凄いな。ご隠居と將軍を同じに扱ってるよー！」

「やっぱ、狐なんじゃない？　お稲荷さんのお使いとかサー」

「馬鹿な事言ってるんじゃないよ。でも変わった子だね」

こんな事で驚いてはいけません。もつと驚く事態が起ります。

なんと、家光は、ご隠居の薄汚い部屋に入り、皆と車座になり酒を呑み出したのです。当然、三太夫も一緒。

「三太夫、この首に紐のついた丸い花瓶のようなものは何じゃ？」

「殿、これは一升徳利と申すもの。酒さけ入れてござります。この丸い輪に指を入れ徳利を、このように二の腕に持ってまいります。そして、この部分を口に持って参り、グビツ……と呑むのでございます。フー、美味いなー！」

「三太夫。おぬし、余の命令を良い事に、ご隠居と酒ばかり呑んでいたの

ではないか。困ったものじゃな。どれどれ、三太夫如きが出来ること、この家光が出来ぬ訳がない。それをこちらに寄越せっ！」

祖父の家康や父親の秀忠は戦場での経験が豊富にあり、一升徳利も知っています。しかし、家光にはそのような経験はありませんので上手く呑めません。絹の豪華な着物はビショビショ。ついには脱ぎだします。長屋の連中、嘩然。家光は三太夫に負ける訳に参りません。必死であります。

グビツ！ フー！

「なんじゃ、これは、これが酒か。異な味じゃな。これは何じゃ？ 黄色っぽい色をしておるが卵焼きではないようじゃな。輪切りになつておる」

「殿、これは沢庵たくわんでござる。例の沢庵和尚が皆に教えたもの。大根を加工し

ております」

「おー沢庵が作ったのか。食するぞ、良いな」

三太夫も出来上がっておりますので、もうどうでも良くなっております。「殿つ、いちいち三太夫めにお聞きにならず、ご自分でお好きにおやりくださいっ！」

三太夫は、ご隠居と話している方が楽しいのであります。

「何じゃ、普段はゴチャゴチャのたまわるくせに……。良いわつ、余も好き勝手をいたすぞっ！」

沢庵をポリポリ、目刺しをムシヤムシヤ。塩辛い事おびただし。城での食事はアツサリ系。しかし気にしません。むしろ、この雰囲気に染まりますと美味くて仕方がない。徳利を抱えグビグビ。

長屋の連中はオドオドします。やはり將軍と呑むのは気が退けます。遠慮しております。

「おいっ、見ろよ。大丈夫かぬ。あれじゃー、ブツ倒れるぞ」

ご隠居と三太夫は、すでにイビキをかいています。

気が付くと、綾が家光の側にチョコンと座っております。不思議と長屋の連中も、これを見て何かホツといたします。綾は看護師。何やかやと世

話をやきます。

「さ、さ、三太夫、三太夫は居らんかーッ！」

家光、完璧なる二日酔い。

三太夫も二日酔い。今、詰所にて老中たちに囲まれ、ヤイノヤイノと文句を言われております。

「お側付の三太夫殿の方が先に酔いつぶれたと聞いてござる。これは如何いたした事でござるか？ 三太夫殿っ！…… 三太夫殿っ！」

三太夫、コックリ、コックリ舟を漕いでおります。

「各々方、如何いたしましたしょうか」

「そうでござるな、今更、三太夫殿を懲戒免職でもあるまいと存ずるが……」

「城内であれば我々がおりますが、問題は城外でござる。殿と二人だけにせぬ方が良くと思われるが」

「如何にも。また問題が生ずると思われる。今後は禁止いたしたいと存ずるが」

「そう致そう」

「そう致そう」

全会一致。三太夫は、まだ舟を漕いでおります。まさか叩き起こす訳にもいかず、老中たちも思案顔。そんな詰所に、フラフラと家光が入ってきます。

「三太夫っ！ これ起きろっ！」

「ムニヨムニヨ…… アツ殿、お早いお目覚めで……」

「何を言うか、既に昼間じゃ。ところで、狐子、いや綾はどこに居るのじや」

「何を申されますか。ご隠居のところは決まっております」

「そうか。何故、余の側に居たくないのかのう」

「当たり前でございます。居たくないのではなく居てはいけなないのでござ

います。そもそも武士と町人は……」

「もう良い。何かと言うと、そもそもじゃつ。偉そうな事を言いおつて。何じゃ、昨夜のていたらくは！」

老中の一人が、ここぞとばかりに話し出します。

「恐れながら……殿。三太夫殿の行状には目を覆うものがござります。そろそろ隠居が宜しいのではないかと存知まするが」

「そうじゃな。そろそろかのー」

これを聞いた三太夫、

「何を申されるかつ！ ぐ神君より、この三太夫、死ぬまで家光さまにお仕えするように言われております。何が隠居でござるか！ 各々方が如何にトチ狂った事を申そうが、三太夫は預かり知らんこと。総てはご神君のお言葉でござる。殿まで隠居などと申されるのであれば、この三太夫、ぐ神君に顔向けができ申さぬ。お側に参り、お許しを頂かねばならぬ」

三太夫、勇ましくもパツと袴を払う……つもりでしたが、二日酔い。どうにも袴を払えない。モタモタしています。周りの者たちは呆れて見ているだけ。やっそこさつとこ皺くちゃの腹を出し、脇差を抜きます。

「殿……三太夫、ぐ神君のお傍に……」

体はユラユラ揺れております。迫力ありません。家光も何となく揺れております。

「三太夫、またか？ ヒック！ 何かと言うと袴を払う。世の中には見て綺麗なものと、そうでないものがある。ヒック！ そちの、その皺々の腹は、どう見ても美しいとは言えぬ。ヒック！ 早くしまえ」

家光、二日酔いで急にシャッキリが出てまいります。なんとも締まりがない。老中たちは、また三太夫殿の腹芸が始まったと苦虫を潰したような面持ち。

「腹をしまえとは、どのような意味でございますか。腹を搔かつさ捌はくくのではなく、首でもくくれと申されるのでござるか！」

「三太夫、ヒック！ そちが首をくくつてみる、鮭の新巻を吊るしたよう

な格好になる。これも美しくはない。ヒック！ 要するに、おぬしはな、天寿をまっとうするまで余の側に仕えてくれれば良いのじや。余もこれが運命と諦めておる。ヒック！ な、頼むわ」

「ははー、ありがたきお言葉！ ウイツ！ 各々方ッ！ ウイツ！ お聞きの通りじや！」

ドテッ！

三太夫、ぶっ倒れてしまいます。

見れば、家光も片腕を枕にグースカ！

老中たち、顔を見合わせて、

「いつまで、この猿芝居を見なければならぬのであるうかのう」

とつぶやきながら、二人をほったらかしにして持ち場に去って行きます。

長屋では、ご隠居が大騒。もう一つの騒は、あの生臭坊主。名前はまんかい満海和尚。昨夜、途中から仲間入りし、呑むわ呑むわ。まるでサハラ砂漠のよななもの。いくら呑んでも酒は、どっかに消えていつてしまいます。話す内容も目を覆いたくなる事ばかり。世慣れた三太夫も、さすがに、

「これクソ坊主。口を慎んでいただきたい。お釈迦様に仕える身でありながら、そのような下賤な内容。そのような話ばかり致すと、お釈迦様が嘆かれる事は必至。おぬし如何致す。お釈迦様が嘆かれても良いのかっ！」

この一言が応えたと見え、満海坊主、クシユンと大人しくなってますたのです。周りが気の毒にと思うほど小さくなってしまったのです。まだ仏に仕える身であることを忘れてはいないのですが、今はご隠居と二人で大の字になり寝ています。

綾は嬉しくて仕方がありません。

—— これなのよねー。この雰囲気。家光ちゃんも、じつちやまも長屋の人たちも誰もが身分をわきまえ、それなりに振舞うけど、一皮むけば皆同じなのよね。でも、この時代の人たちはウイスキーのような強いお酒

を呑んだ事がないから、あんな弱いお酒で酔っ払っちゃうのね。私なんか物足りなかったわ。家光ちゃんたらムキになって呑んでたけど、大丈夫かな？

何となく家光のことが気掛かりになってきます。

「じっちゃまっ！　じっちゃま！　私、今からお城に行つて来る」

ご隠居は夢の中で、そうか判つたと返事をいたします。

江戸城、大手門。

「家光ちゃんに会いたいんだけど、通してっ！」

門番はビツクリ仰天。確かに髪の毛は黒くなっていますが、顔には見覚えがあります。以前、物干し竿を持ってきた娘です。しかし、あの時は口を利いていません。突然聞いた家光ちゃんとの言葉に、右往左往してしまします。

「ちよつと待つておれ。取り次ぐべきかどうか拙者には判断が出来ん。しかし、征夷大將軍に対し、そのような呼び方をいたすと三太夫殿がそなたを八つ裂きに致すぞ。慎んだ方が良い」

「あーら、三太夫なんて私のダチだもんね。そうね、三太夫を呼んで」

「三太夫様を呼びつけにっ！　それにダチとは何でござるか？」

「友だちの意味よ。ねー、早く三太夫を呼んで。グズグズしてるんなら、私一人でお城の中に入っちゃうよっ！」

「ちよつと待つて。判り申した。呼んで参る」

門番、ソソクサと城内に入っていきます。

何しろ広い江戸城です。門番の言伝ことづてが幕府のお偉ら方に届けられるまでには何人もの口を介さなければなりません。とにかく三太夫に伝えられましたが、時間にして約一時間十分。言伝を聞いた三太夫、喜んでしまします。

「何っ！　綾殿が自ら殿に会いに来たのかっ！　そーか、そーか。殿が喜ぶ、殿が喜ぶ」

まるでアイロンを掛ける前の敷布のようなクシヤクシヤな顔で走ります。城内を走ったりすれば、お家取り潰しのお沙汰を受けようというもの。すれ違ふ者たちも目を真ん丸にして三太夫を見ます。

「ついに三太夫殿も毫碌ちゆうろくなきったようだ。惨めでござるなー」

「如何にも。アーはなりたくないものですな。お勤めが長過ぎたのでござる。もそつと早くに隠居なされば良かったもの」

などと囁ささやいております。

三太夫は一心不乱に走りましたが、広い江戸城でございます。三太夫が門に到着したのは伝言を聞いてから約二十分後。合計、一時間三十分も経っております。

門に辿り着いた三太夫、門番が土下座している姿を見ます。

「如何致したっ！ 綾殿は何処に居られるっ！」

門番の一人が恐々口を開きます。

「三太夫様っ！ 誠に誠に申し訳ないことをしてしまいました。あの娘御は、しばし、ここに立っておられました。プイツと振り向き、サツサと行ってしまわれました。走り寄り、お止め致しましたが、何せお口が達者なお方ゆえ我々ではお止めできませんでした。何をしているの？ 幾ら何でも遅いじゃない。キータイデンワやインターポンが無いのは判るけど、遅すぎるわ！ と申されまして……。ところで三太夫様、キータイデンワとか、インターポンとは何でござるか？」

「馬鹿者っ！ 何が、ポンじゃっ！ そんなもの、拙者が判る訳なからう。本当に綾殿は帰ってしまったのか？」

「ハハハッ！」

三太夫、ガツカリ。堅く強張り、皺々で乾ききった表情。まるでスルメ烏賊のような形相であります。

綾が、プリプリしながら歩いておられます。

—— そうよね……、江戸時代だもん！　そう簡単に將軍になんか会えないわよねー。でも取り次ぎを待っていたら、本当に日が暮れちゃいそう。余り遅くなるとじつちやまが心配すると思つて帰つてきちゃったけど……。ヤッパ難しいのかな、気楽に家光ちゃんや三太夫に会うのは……

シヨンボリ帰つてきた綾を見て、ご隠居はビツクリ！

「綾つ、何処に行つてたのじゃ？　それに何があつたのだ、心配したぞ！」
「じつちやま、綾は、ちゃんとじつちやまに行き先を言いました。じつちやまは、そうか、判つたつて言つたわよ」

ご隠居、これからは酒を慎もうなどとうなだれながら真面目に考えます。

お城では大変な事が起こつております。

家光が怒り心頭。滅多に青筋を立てたり致しません、今回は別。とは言え取次ぎ手順を決めたのは自分。許可無い者を城内に入れてはいかんと決めたのも自分。しかも、お側役の三太夫は干乾びるほど一所懸命に走つたとの事。三太夫に八つ当たりすることも出来ません。家臣は自分の決めた仕組み通りに対処しています。綾が帰つちやつた事には、腸が煮え練り返るほどの思いであります、どうしようありません。この度のような突発事態まで考えは及びません。

家光、ただ部屋の中をあつちへウロウロ、こつちへウロウロ。三太夫は干乾びて側に座っているだけ。

綾は反省しています。

—— 帰つてきちやつたけど……時代が違うんだよねー。少しは理解しなくちやいけないのかな。

三太夫は干乾びちやつた翌日、水をタップリ呑んで蘇生いたします。まるで乾燥野菜のような何とも恐いお人であります。

—— 綾殿は会いに来たのじゃ。これは無視できん。綾殿は段取りを心得ていなかったのじゃ。これは当然のこと。町人がそんな事を知っている訳がない。良いではないか、拙者が間に立てば。

おふれを城内に出します。

『綾と申す女子が城に訪れた場合、即、三太夫元に連れて参るように』
精々こんなものでございます。なんてったって江戸時代ですから。

じっちゃまは、寝ている間に何が起こったかなどは知りません。

綾は大人しくなっています。ご隠居、気になります。

「綾つ、どうしたのじゃ？ 口数が少ないが……。この老いぼれに出来る事があれば言ってくれぬか」

綾は黙っています。

—— 二十一世紀に生きる自分が、こんな風になっている。変な本を読んだためにタイムスリップの確実性が判ってしまった。そして実行してしまった。歴史を変えるつもりなんてない。ただ、みんなが好きなのだ。私だって歴史の勉強はしたわ。徳川幕府が明治維新まで続くことは判っている。あの本には、何をしようが歴史を変えるものではないと書いてある。何をして良いとは判ってる。でも、綾は何をしたいの？

綾は静かな毎日を送るようになっています。

三 長屋の連中が空を飛んだ

綾は、久しぶりに飛んでみたくなりました。小高い丘に登り、江戸の大空をゆっくりと飛び回ります。現代に戻る方法は判っています。

—— 今、ただ飛んでいただけ。

天守閣で空ろな目付きで空を見ていた家光が綾を見つめます。

「三太夫っ！ 三太夫！」

「へへっ。何でございますか？」

「近ごろ例の遣り取りはございません。」

「見よ！ 綾が飛んでおる。優雅じやのー。どのような景色が見えるのかのー」

「ははーっ」

「三太夫、綾はやはり普通の町人ではない。何か事情があるのだろうか、いずれ知りたいたいのじゃ。三太夫は何か知っておるのか？」

「殿、ご隠居は何も話してはくれませぬ。三太夫も無理に聞く気はござりませぬ。殿、この事につきましても命令なされるのはお許し頂きたいのでござりまするが」

「安心せよ。この家光、そこまで愚かではないわ。また綾は来てくれるかのー」

長屋の連中が話しています。

「俺たちも飛びたいなー」

「そうだ、そうだ。俺たちも飛びたい！」

綾に頼みます。

「ご免ね、これは綾にとって命の次に大切なものなの。ご免」

と使わせてくれません。でも長屋の連中は文句を言いません。綾の気持ちを大切にしています。

これを聞いていたご隠居、急に外に出かけていきます。

しばらくして若い大工を連れてきます。

「綾、こいつはな、まだ十六だが、わしが目を掛けている大工じゃ。佐吉、これが綾じゃ。綾、佐吉にだけはトンビを見せてやって欲しいのだが、どうじゃ」

「へー、じつちやまが認めている大工さんなんだ。イーよ。佐吉さんこっちよ」

佐吉は、ハング・グライダーを隈なく調べます。急にニコニコいたします。

「綾さん、ありがとう。判ったよ。ありがとう」

何日か経ったある日、佐吉が大八車に何やら乗せてやってきます。

「ご隠居。いや師匠、一緒をお願いします」

ご隠居、目付きが変わってきます。それにつれ、体がシャキツとしてまいます。恐ろしいものであります。あのホノボノ爺さんが、まるで鬼のような雰囲気を漂わせます。イナセなデークの八五郎に戻ります。

佐吉が持ってきたのは、選りすぐられた竹、綱、そして和紙です。この和紙は分厚く、しかも表面には蒟蒻（こたけ）の粉を煮たものが塗ってあります。滅多に破れませんし雨にも強い。

佐吉は図面を開きます。ハング・グライダーとトンビ凧を足して二で割ったような図が書かれています。

トンビ凧と言う凧がありますが、これは頑丈で他の凧と違い尻尾がいりません。尻尾なしで空高く舞い上がります。

佐吉は竹を裂きます。そして丁寧に束ねます。そのままの竹よりもこの様にした方が同じ重さでも強度が増しますし撓しなみます。綱は絹で出来ていません。軽く強い綱です。佐吉は、このような高価な材料を買うことは出来ません。実は三太夫に頼んだのであります。綾の知り合いだと強引に三太夫に会い、事情を説明したのであります。蘇生した三太夫、一も二もなく手配いたしました。三太夫、遣る事は遣るのであります。

鬼の八五郎と佐吉は、設計図に従い作っていきます。

綾は、ご隠居に驚きます。

—— やーだ！ あんなに爺臭くしてたくせに、何よっ！ 現役そのも

のじゃん。やっぱ人間は気持ね。気合が入るとシャンとしちやうもん。
綾は目頭が熱くなってきました。

三日三晩の苦闘の末、ついに大トンビが出来上がります。ご隠居も佐吉もダウン。ガーガー騒をかいて眠り込んでしまいます。

まる一日寝込んだ後、いよいよ大トンビを外に出しましたが、長屋の連中はビックリ！　こんな大きなトンビ風は見た事がありません。しかも、佐吉は一人で軽々と持ち上げています。綾はハング・グライダーを持っていません。

丘の上。

綾は佐吉に空を飛ぶ要領を教えます。ちようど良い風が吹いてきます。さー飛行です。まず綾が飛び立ちます。そして佐吉を促します。やはり佐吉は恐いのでしょうか、躊躇しています。綾は大声で叫びます。

「佐吉ーっ！　何遣ってんのよっ！　おちんちん持つてるんでしよう。さー、飛ぶのよーっ！」

長屋のおかみさん連中は大笑い。

「おちんちんだってさー。綾も良く言うよ。佐吉っあっん、あんたどうすんのよ！」

佐吉は真っ青！　助け舟の積りで鬼の八五郎を見ますが、八五郎、腕を組み目をつぶったまんま。佐吉、出来栄えには自信がありますが、相手は空です。

ついに覚悟を決め、ゆっくり走り出します。
フワッ！

空に舞い上がっていきます。足は地面に着いていません。空です。

佐吉は、徐々に喜びが湧き出てきます。

「空だっ！　あれはっ？　江戸城だっ！」

江戸の町が一望できます。綾が側に来て大声で訊きます。

「佐吉っ！　どんな気分っ？」

「綾さーんっ！ 気分は最高！」

次々と長屋の連中が空を飛びます。大トンビに自信を持った佐吉は、ご隠居にも勧めます。ところが、あのイナセな八五郎が、急にご隠居に戻ってしまいます。

「いやー、まー、そのー、なんと言うかー、このような事は若い者に……」
佐吉と綾、

「やっぱ恐いんだ。粋がっていたけど恐いんだ。隠居は隠居だっ！」

などといじめます。そこまで言われますと、黙ってはいられません。

「なんと隠居は隠居となっ！ 知らざー言って聞かせやしよー……」

ご隠居は粋がりますが、二人はソツポを向いてしまいます。

飛んだのです。ご隠居も飛んだのです。飛んでる間、ご隠居の目には涙、涙であります。

—— 長生きして良かった。バーさん、まだまだバーさんの所には行かんぞ！ もう少し待ってくれっ！ これからも何が起こるか判らん。もう少し楽しみたいのじゃっ！ バーさん済まんっ！

皆、空から戻って来ると顔付きが変わってしまいます。そうなんです。人間の営みを空から見ると、己の存在の小ささを知るとともに、一人一人に対する愛おしさを感じるものなのです。

なんと、あの三太夫も来ました。

「ご隠居、いやさ八五郎！ 拙者も飛んでみたい！」

ご隠居は余裕綽々。

「三太夫殿。そう気軽に物事を捉えてはいけません。空を飛ぶということ
はなー、エヘン……」

しかし、急に黙ってしまいます。綾が側に来たのです。佐吉も一緒。

「綾殿、佐吉殿。後生でござる。この三太夫めも空を飛んでみたいのじゃ。

頼むっ！」

綾が静かに言います。

「三太夫が飛んだら、家光ちゃんが飛びたいって言った時、何て言うの。止められないよっ！ それでもイーの？ 本当言う空を飛ぶのは危険なのよ」

三太夫、目を剥いてしまいます。綾が言う事は道理です。家光が飛びたいと言いだしたら、また皺々の腹を出すつもりでいたのです。その自分が飛びたがっている。これでは道理に適用しません。腕を組み目を瞑り、額に皺を寄せ、いや、さらに皺々にして考えます。

「綾殿、ありがとう。その通りじゃ。その通り。殿に何かがあつてはいかぬのじゃ。イヤー、この三太夫、スッキリいたした。ご隠居、おぬしは良いのー。その歳で冒険ができる。羨ましい限りじゃっ！」

この話は家光にも伝わります。

—— 三太夫め小癪なことを遣りおる。飛ぶのを我慢したとはな。何かというご隠居と張り合うくせに。

家光、自分は飛べないかと悟ります。

綾が久しぶりにお城で家光に会っています。

「綾、おぬしは不思議な女子じゃな。家光、政をしていない時は、おぬしの事ばかり考えておる。おぬしのことばかりじゃ」

「家光ちゃん。私、遊びに来てあげるね。家光ちゃんも気楽に長屋に来れば良いのよ。徳川幕府は、これから二百年も安泰なんだから」

—— シマツタツ！

綾は口をつむりますが、ちよつと遅かったようです。

「綾っ！ 今、何と申したっ！」

家光の形相が変わります。恐ろしい形相です。綾は怯みませんが、自分の失言には呆れています。気楽な雰囲気口を軽くしてしまつたのです。

—— どうしよう言ってしまった。言ってはいけない事を……

「綾！ 二百年とは、どう言うことなのだ。綾！ 何を知っているのだ。話してはくれぬのか。話してはいけないのか。綾ッ！」

「ごめん。本当にごめん。綾、ちよっとお調子に乗っちゃったみたい。滅茶苦茶なこと言っちゃって」

家光は、何かを感じました。

—— 二百年…… 徳川幕府はこれから二百年続くのか。この綾は、それを知っている。何故、知っているのでしょうか。占い師。いや違う、そんなものではない。確信を持って言った。何か我々を越えた世界の人間なのだろうか。待てよ、二百年後は、どうなるのだ。徳川幕府は二百年後に幕を閉じる。誰が、どのようにして……。知りたい。しかし、綾は、これ以上語るまい。絶対に！ シツカリした女子じゃ……。いや、余とした事が何を考えておるのじゃ。知ってはいけないのじゃ。知る必要などないのじゃ。今の政が大切なのじゃ。二百年後は二百年後。綾にも何かの事情がある。これ以上、問い詰めるのは止めよう。

家光が優しい顔になり話します。

「綾、また遊びに来てくれぬか。余も、あの不思議な一升徳利の酒を呑んでみたい。しかし沢庵や目刺しは塩辛いのー」

綾は判りました。家光がこれ以上聞いてこないことを。

「家光っちゃんは優しい人。綾、ホッとしちゃった。綾もこれから気をつける。家光っちゃん、これからも綾と付き合ってくれる？」

家光、ビツクリ。付き合う？ 女性の方から付き合って欲しいなんて言われたのは生まれて初めての経験。

「それは、どう言う意味なのじゃ」

「家光っちゃん、どうしたの？ 変よっ！ 気楽に会いましょうって事よっ。駄目？」

「嬉しい！」

天下の大將軍、満面笑み。イーね、男と女は。

幕藩体制は着々と堅固なものになっていきます。参勤交代、鎖国。日本独自の文化が培われる基礎が出来上がっていきます。

下にーッ！ 下にーッ！

髭を生やした奴さんが威勢良く振り廻す毛槍を先頭に、贅を尽くした大名行列が進みます。参勤交代の行列です。

当時は、まだ武家の方が町民より裕福な時代です。何々藩は、こうだった。いや何々藩の方が豪勢だったと噂をいたします。綾は映画でしか見たことがありませんが、実物の素晴らしさにビックリ。

—— 素敵っ！ 素敵だわー！

江戸市中に入りますと、お女中たちは綺麗な着物に着替えます。今で言うデモンストレーションです。ま、大名の見栄の張り合いのようなものがあります。

幕府にとって参勤交代には幾つかの目的がありますが、その一つに大名たちに贅を凝らさせ見栄を張らせることで、その蓄えを浪費させることがあります。諸藩の財政的な力を減らし、謀反むほんなどを起こさせないためです。ところが、後になると諸藩にとり大変な負担になっていきます。その他には、隔年に藩主と顔を合わせることで幕府に対する忠誠心を探ったり、五街道の整備、文化や文物の交流などがあります。また、今までは京都が日本首都だったのですが、政治の中心は江戸であるとの認識を、深めさせる目的もありました。

ある藩の大名行列が進んでいましたが、大変な事が起こりました。大名行列の上を大トンビが飛んだのです。はるか上空ですが、名うての口うるさい家老が気付きました。

「無礼者！ 我が藩主の頭の上を越えるとは、不届き千番！ ひっ捕らえろ！」

大トンビの話は地方にも伝わっています。聞いた者たちは羨ましくて仕方ありませんが、遠い江戸での話であります。しかも幕府は、町民の遊びとして認めましたが、侍たちには禁止いたしました。

命令された侍連中が汗だくになり追いかけますが、捕まるものではありません。しかし、命令した家老は腹の虫が収まりません。江戸屋敷に着いた後も家来を手分けして搜索させます。

この話が佐吉の耳に入ります。佐吉が飛んでいたのではありませんが、自分が作った大トンビです。佐吉は、自ら大名屋敷に名乗り出ました。

家老は、佐吉を南町奉行所に引き連れていき、罰を与えろと怒鳴ります。しかし奉行所も困ってしまいます。藩主の頭をまた跨いだのであれば、当然、捕まえることは出来ませんが、はるか上空です。そんな判例はありません。頭を抱えてしまいますが、家老は、打ち首じゃ、と騒ぎ立てます。

奉行と与力たちは話し合います。

「困ったのー、如何がいたそう。第一、佐吉だが、あの日は普請場で仕事をしていたそうじゃ。何故、自首してきたのかのー」

「自分が作った大トンビだからじゃ」

「では、大トンビを召し捕らえれば良いのではないか」

「何を言っておるのじゃ。そんな事であの家老が納得する訳がなからう」

「では、どうすれば良いのじゃ」

「我々だけで判断するのは危険でござらう」

どのような組織、集団にも何でも屋と呼ばれるお人がおります。

「三太夫殿にご相談いたそう」

南町奉行が三太夫を訪ねます。

「三太夫殿、か斯くしか然々しかでございます。如何いたせば良いであろうか。お知恵を拝借したい」

事情を聞いた三太夫、

「佐吉を釈放いたせ」

「さ、三太夫殿！ あの家老が黙っては居りませぬまい。藩主を通し、大殿に進言でもされれば、面倒な事になるのではござらぬか」

「家老には、こう申せば良い。大トンビは、江戸城の上、つまり家光公の上を飛んだのだぞ。家光公は、お城を飛び越えていく大トンビを嬉しそうに眺めていたとな。拙者も一緒に居った」

「か、忝い。三太夫殿っ！」

早速、佐吉は釈放。例の家老は、その後大人しくなったとか。

綾は、江戸市中を散歩します。

空から見ていますので地理は大体判っています。豪勢な大名屋敷、神社・仏閣。町人の粗末な長屋。着物などを扱う大店。二十一世紀の街並みと比較すると楽しくて仕方ありません。しかし、気になることがあります。武家、町人に限らず、病人や怪我人が多い事です。当たり前な事ですが、現代に比べ衛生、栄養、医療など総ての面で未開です。平均年齢が四十幾つこの時代。

看護師さんである綾は気になって仕方がないのですが、どうしようもありません。現代に戻り薬などを持つてくることはできませんが、それらを使ったりすれば、思いも寄らない副作用を招きかねません。人間は、長い年月を経て生理的、肉体的な面で変化しています。

ある日、家光に言います。

「家光ちゃん、何とかならないのかなー。せめて葉ぐらい簡単に手に入るようにした方が、イーと思うけど」

家光は、結構行動家であります。早速、対策に取り掛かります。

江戸城の南側と北側の二箇所小石川薬園を作ります。千六百三十八年の事であります。これは薬草園です。綾は家光の心意気には感心しますが、

庶民の手に届くものではありません。

——でも……ま、仕方ないな。

この薬園は、後に南園は現在の小石川植物園に移されます。また吉宗が小石川養生所を作ったのは九十四年後の事。

綾は、ご殿医や町医者を集めます。せめて衛生面、傷の手当てくらいは教えても良いだろうとの判断です。食事の前に手を洗う事、古くなった食べ物は何れ無いいけど食べてはいけない事、水溜りは極力なくす事、傷は良く洗いお酒でよいから消毒する事、野菜をたくさん食べる事、目に入った塵は水できれいに洗い流す事、うがいには塩をちよつと入れてやった方が良し事、風邪をひいたら……、下痢をしたら……

家光は、そのような綾の姿をニコニコしながら見ています。

綾は、二十一世紀に戻る気がなくなったのでしょうか。

四 江戸の夏

「三太夫っ！ 三太夫は、居らんかつ！ 何処に居るのだっ！ また、フラつきおって、尻の軽い奴じゃ」

季節は真夏。家光、イライラしております。天下の大將軍が貧乏ゆすり。どうにも品がありません。

「遅くなってしまい申した。三太夫めにご座います。フーツー」

「何をしてやった。呼ばれたら、すぐに参れっ！ 良いなっ！」

「誠に申し訳なく存じます。以後、気を付けますゆえ、そう機嫌を悪るうなさらしないで下さいませ。この年若い三太夫、殿の怒った顔を見るのが辛うご座います」

「怒ってなどおらん」

「いや、怒っております」

「怒つてなどおらん、と申しておるであらうがッ！」

「それ御覧なされ。殿は、怒っております」

「何を申すかつ！ そちが同じ事をクドクド言うから大声を出したまでのこと。余は怒つてなど居らんかったぞ！」

「再三にわたる不調法。お許しくださいませ。ところで、何ぞ用でございますか。お声の調子では、余程、重要な内容と察せられますが？」

「うーん、まー、それほど重要な用件とも言えぬが……」

「おっしゃってくださいませ。どのような内容であっても、この三太夫、肝が据わっておりますゆえ、冷静にお聞きいたします」

「……」

「殿っ！ 如何いたしました？ そんなに申しにくい事なのでございますかッ！」

「いや、その……。三太夫。今日は、暑いな」

「ハッ？ た、確かに本日は、暑うございます。で、用件は？」

「……」

「殿っ！ まさか、今日は暑いなど申す為に、この三太夫をお呼びになつたわけではありません……」

家光、黙っています。

「どうやら、そのためだけにお呼びになったようですね。確かに、この三太夫、既に歳を取り、耄碌しているやも知れませぬ。しかし、こう見えなくても、きちんと公務を受け持つ身でございます。ただ今も、老中連中とこの夏の暑さについて評議をしていた最中でございます。それを、今日は暑いと申すだけの為に、機嫌の悪い声を出し、呼び付けたのでございますか」

何ともバツの悪そうな家光。

「夏は暑いのは当たり前のごさいます。何も殿だけが暑いのではございませぬ。あー、ただ、それだけの為にっ！ 三太夫は情けなく存じま

す。そもそも征夷將軍たるものは、この国を治める立場にあります。民の苦しみ、辛さを知り、共に悩み、共に解決策を考えなければならぬはず。それが己が暑いからといって、大事な評議中の三太夫を呼び付ける。殿のオシメを取り替え、赤子の頃よりお仕えしておりますが、このように自分本位なお方にお育てしてしまつたとはっ！ これでは、ご神君に申し訳が立ちません。この三太夫、お詫びのため腹を……」

「三太夫、すぐに腹を腹をと申すが、たまには別の方法を考えたらどうじや。老中たちと重要な評議をしていたとは知らなんだ。そう怒るな。ところで、どんな評議をしておつたのじや」

「殿、やはり暑いのは、皆、閉口しております。そこで袷による登城を考え直したらどうかとの評議をしております」

「なるほど。で、どのような考えが出ておるのじや」

「着流し、または作務衣でも良いのではと……」

「何ーッ！ 着流し、作務衣っ！ 武士たるものが作務衣で登城と申すかっ！ こ、この愚か者がッ！ な、何が重要な評議じやっ！ 余の事を、

ドーのコーの言えるかっ！ 老中連中を呼べっ！」

相変わらずの二人であります。

江戸の夏。川辺の柳が風に揺れ、真夏の風情をかもし出しています。庶民は部屋の間取り払い、替わりに簾を掛けて風通しを良くします。

昼間、暑い時には庭の盥で行水。浴衣姿に団扇。なんとも情緒たっぷりの風景。白玉を水で冷やし、黄な粉、蜜をかけて食べる。井戸には桶に入れた西瓜。男連中は禪一丁で昼寝。夜になると路地に縁台をだし、団扇片手に将棋に興じる。蚊が来れば団扇で叩き、蚊やりこを燻します。線香花火も夏の風情。シュパツ・シュパツと花を開く。

ご隠居も、この暑さに辟易（ひきやく）としていきます。大根の尻尾のような鬚（ひげ）しかない禿げた頭に、冷やした手拭い（てぬぐい）を乗せ、団扇で股座を煽いでいる。何とも

だらしのない格好であります。

綾は浴衣が良く似合います。髪の毛は肩までしかありませんが、これが返って童女のような雰囲気を漂わせます。下駄を履き、団扇で顔を煽ぎながら街をカランコロン。通りすがりの男連中は、必ず振り返ります。そんな連中には目も呉れず、にこやか涼しげに歩いていきます。

—— 長屋の人たちは、皆、暑い暑いと言うけれど、現代に比べれば、そんなに暑くはないわ。空気は澄んでいるし地面は舗装なんかされていない。それに緑が多いし風が良く通る。蚊が多いのは困るけど、過ごし易い感じ。クーラーなんか無くても平気。東京のコンクリートジャングルを考えれば、ここは自然そのもの。まるで避暑地みたい。でも日本髪や丁髷って、ちよっと可哀想。冬ならいいけど、夏はね。それにしても日本髪に浴衣って素敵！ やっぱ日本人は、こうでなくっちゃね。

なんてつぶやきながら軽やかに歩き続けます。

「佐吉つあん、居る？」

「やー、綾さん。暑いねー。ところで何だい？」

「この前の大トンビ事件だけどさー、佐吉つあん、格好良かったよ。自分が飛んでた訳じゃないのに奉行所に行くなんて男らしいところ、あるじゃん」

「てやんでー、こちらら江戸っ子よっ！ 連中、訳の判らねえ事、言ってるからよー、ちよっと顔出してみただけよ。てえした事じゃねえよ」

「まあ、粋がっちゃってさ。一端いっぽうの男衆みたいじゃない。でも、三太夫きんて機転が利くわね。大トンビはお城の上も飛ぶだつてさ。家光っちゃんの上を飛んでも、家光っちゃん嬉しそうに見ているだつてさ。あれじゃ、あの家老だつて何も言えなくなっちゃうよね」

「そうよ。あの三太夫さん、普段はポケツとしていたようにだけど、将軍がお側に置いてあるだけの事はある。結構、頭は切れるぜ。正直、助かったって思ったよ」

「ほらご覧なさい。粋がったって、本心はビクビクしてたんじやない」
「綾さん、そー言わないでくださいよ。ところで隠居は、どうしてる」

「もうダラシないったらありやしない。暑い暑いで、まるで鄙びた茄子みたい。禪一丁なんでもん。見られたもんじやないわ」

「この暑さだ、年寄りには心えるんだよ」

「そう言えば、佐吉つあんは、きちんとしてるね」

「あたりめえよ。江戸っ子は暑かろうが寒かろうが、ピーチク言わねえもんだ。一町ほど先の長屋じや、タツプリ綿が入った搔巻を着て部屋を閉め切り、真っ赤な炭をてんこ盛りにした火鉢。おまけに炬燵こたに体を突っ込んで寒い寒いと我慢比べだ。俺はそこまで粋がるつもりはねえけどなっ」

「佐吉つあん。それって、今、遣ってんの？」

「そーよ。ついさっき見てきたばかりだ」

急に綾が走り出しました。佐吉は、びっくりして後を追います。

その長屋では近所の連中が面白がって障子越しに掛け声を掛けています。

「どうしたのよっ！ まだ寒いんじゃないの。炭を持って来てやろうか。」

何黙ってんだよ。返事くらいしたらどうなんだいっ！」

「茹だっちやつてるんじゃないのかい？ いい加減、意地の張りっこは、お止しよっ。まったく馬鹿な連中なんだから」

そこに綾と佐吉が飛んできます。綾は入り口を開けようとしませんが、中から心張り棒を掛けているようで開きません。

「佐吉つあん、ここを開けてっ！ 早くっ、早くしてっ！」

佐吉は何が何だか判りませんが、言われた通りにします。

中からムーツとした臭いと熱気。炬燵の周りには三人が天井を向いて口をアングリ。目を半開きにした状態。綾は三人を看ましたが、斑点はありません。二酸化酸素中毒にはなっていない様子。熱射病と酸欠状態。外に連れ出し、裸にして体を冷やします。他の連中に声を掛け人工呼吸を施し

ます。

三人は大工仲間。吾助が謝ります。

「綾さん。済みませんでした。お陰で助かりました。このご恩は一生忘れません。ご恩返しに、綾さんの面倒を死ぬまでみさせてください」

平助も言い出します。

「私に見させてください。私は真面目だけが取り得の男ですが、吾助のようなチャカチャカした男ではありません」

「二人は口だけの人間です。その点、この喜助は腕も確か。私が死ぬまで面倒を看ます」

看ます、看ますの連呼。どううやら綾は若い男連中の憧れの的のようでもあります。しかし、綾は呆れています。

「あんた達みたいな、無茶苦茶な人たちに私の一生を預ける訳にはいきません。馬鹿な事言っていないで反省しなさいっ！ もうちよつとで、あの世行きだったのよ！ 何でこんな馬鹿なことをしたの？」

事情を聞いて、さらに呆れてしまいます。

三人は同じ長屋の店子で仲良し。今日も暑い暑いとグチをこぼしながら街を歩いておりましたが、一分銀が落ちているのを見つめます。一分銀ですから一両の四分の一。まー、今で言えば、三、四万円と言うところでしようか。

「オイ、どうするよ？」

「番所に届けるか」

「そうだなっ。いや待てよ。届けたって役人が懐に入れるのは目に見えてるぜ。これは、俺のもんだ」

「何、言ってるんだよ。見つけたのは俺だぜ！」

「馬鹿言っちゃいけねー。最初に目え付けたのは、この俺だっ。だから俺のもんだよ」

三人でワイワイ、ガヤガヤ。埒があきません。

「じゃー、こうしよう。禁止言葉を決めて最後に残ったものが貰うってのはどうだい」

それは良い、それは面白いってんで、禁止言葉を「暑い」に決めます。カンカン照りの中を歩いたり、野原に寝転んだりしますが、今日は涼しいね。いや寒いくらいだななどと誰も暑いと言いません。じゃーっ、てんで焚き火をしたり、その周りを走ってみたりしますが効果はなし。こうなる玩意地の張りっこです。

いっそ部屋を閉め切り、搔卷を着て火鉢、炬燵に炭をガンガン。部屋の中で鰻でも焼いて喰おうと言うことになりました。どうせなら豪勢に遣ろうと高価な鰻をしこたま、炭も嫌と言うほど買います。勿論、拾った一文銀がありますので金の心配はありません。

火鉢、七輪に炭をおこし、炬燵にも入れます。既に三人は搔卷を着て動き回っています。この長屋の連中も、また、あの三人が馬鹿な事を始めたよと面白がって見えています。人に見られるとお調子者は、ますますお調子に乗ります。

「夏の搔卷は涼しくていいや。余り涼しくて汗が出てくらー」

「それにしても鰻ってやつは扱い難いねえ。おい、その千枚通しを取ってくれ。こいつでこの鰻の頭を、こうやって俎板に押さえつけ、ブスッと刺しやーイイんだが……、上手いかねー。オイ、土間に落ちてる、そのの鮑屑わかずと大鋸屑おがくずを取ってくれ。そうそう、そんだけありやー何とかなる。ほれみろっ。すべらねえ。こうやって背開きだ。上手いもんだ。エッ、開いた鰻が大鋸屑だらけだつて。イーじゃネえか。どうせ焼くんだ。この大鋸屑が香ばしい香りを付けてくれるんだよっ。七輪をもっとこっちに寄せてくれ。そうそう。それでいい。さー、焼くぞ。団扇で、こうやって風を送る。なっ、炭が真っ赤にならー。この餅網の上に串刺しの鰻を乗せるんだよ。なっ！ 見るよ、油が滴り落ちらー。いいね、この煙。目から汗が出

らー。鰻ちゃんは今、炭の上で身をよじらせて、あ……、アブネー、あぶねー」

「どうしたんだよっ。あ、の次は何だよっ」

「あ、ありがとう、ありがとうって言ってるーな」

「上手くごまかしやがったな。しかし、この掻巻ってやつは凄いな。寒いったらありやしねえ。それにこの火鉢も頑張ってるね。真っ赤な炭が盛り上がったらー。堪らねえな！ こんな寒いのは生まれて初めてだ」

「焼けたぞ。さー、あ……、冷えねえうちに喰おうか」

「大鋸屑が炭になってへばり付いてるじゃねーか。真っ黒だよ」

「この方が虫下しになっていいんだよっ」

「うへー、こりや、あ……から、口ん中が火傷しそーだ」

「何だよっ。あ、じゃ判んねえよ」

「あ、あまりにもウメー鰻だから火傷しそーだっ」

「何言ってるんだよっ！ 旨くて火傷なんかするもんかい。火傷ってえのはな、あ、あ、……の時になるもんなんだよっ！」

「あ、……の時になるのかい。そーかい。何だか訳が判らなくなってきたなー」

「オイツ、炬燵から湯気がでたらー。この布団は何年、日に干してねえんだっ！ 煙と湯気で部屋ん中が火事場だね。平助、白目剥くんじゃねえよっ」

「もう、あ、あ、あ……、あ、頭がボーとして堪んねえ」

「あ、あ、あ……」

「あ、あ、あ、あ……」

三人は気絶。その時、佐吉が入り口を開けたのであります。

残った金は、たったの九文。三人で山分けすることにしましたが、結局、一人三文づつ。馬鹿な話です。

後日談ですが、この話が御上に伝わります。

三人は「猫糞」の罪で湯屋の釜焚きを七日間遣らされる事になります。この暑い中、釜の前で同じ事を繰り返します。そして暑い暑いを言い続けたとの事ですが、お陰で馬鹿な事は遣らなくなったようです。良い勉強になった訳です。

同じ事を何遍も繰り返す勉強方法「九文式」は、ここから生まれたそうですな。エッ、字が違う。公文ですか？ まー、そう固い事は……

暑さが続く江戸であります。

綾の勉強会も暑さ対策が中心になります。傷んだ食べ物による食中毒や食欲不振による体力、抵抗力の減少、虫刺されなどが問題になります。衛生面の指導、塩分、水分の補給の大切さ、虫に刺された時、口で毒素を吸い出す方法を説きます。

この時代は、余り肌を出す習慣はありませんので、日焼けによる炎症などはありません。また、いろいろな編み笠がありましたし、長時間の外出時には編み笠を着用いたしますので日射病も現代ほど多くはありません。

綾はお城での勉強会にも浴衣姿。団扇片手に涼しげに説明します。

そんな姿を眺めている家光、浴衣姿の綾と市中を散歩したくて仕方がありません。

「三太夫、何とかならんか」

「殿、そう言われましても……」

「綾が嫌がるんでも思うのか？」

「いえ。痩せても枯れても殿は將軍ですから」

「どう言うことだ。その痩せても枯れてもとは！ 余は、そちとは違う。まだ痩せてもいなければ枯れてもおらん。言葉が過ぎるぞー」

「何を申される。言葉の綾でございます」

「言葉の綾か。言葉の綾ではなく、あの綾の事を申しておる。何とかならんかのー」

幕藩体制は整いつつあり、世の中も落ち着いてきております。とは言え

地方では領主の苛政などによる不穏な出来事も起こっております。いつの時代にも完全なる平和はないようであります。

江戸は秩序が守られております。三太夫、余りにも家光を政にがんじがらめにしておくのも……と考え出しております。

「殿、では、お忍びで一丁遣ってみますか！」

「何じや、一丁遣ってみる、とは」

「長屋で覚えた言葉でございます。何となく勢いを感じさせる言い回しは、ございせんか。私は町人言葉が好きになっております。特に好きな言い回しは、てやんでー、こちとら江戸っ子でーっ！ であります」

「そうか。江戸っ子か。良い言葉じゃのー。余も江戸っ子かつ」

「モチー、江戸っ子ヨッ！」

「何じや、それは」

「綾殿から教わったのでございます。モチーは、勿論の意味であります」

「では、ヨッ！ は何じや」

「である、の意味と思われます。そもそも……」

「また、そもそもか。そちの口癖じゃのー」

「そもそも江戸っ子とは、江戸に三代続けて住まった場合に言えるものがあります。殿は三代目。真正正銘、江戸っ子でございます」

「そうか。では、ご神君は江戸っ子ではないのじやな」

「如何にも。恐れ多くもご神君は三河者でございます。そもそも……」

「三太夫、もう良い。ところで、如何にして一丁遣るのじや？」

「この三太夫。一丁遣ると申した以上、一丁遣りまするゆえ、ご安心くだされ」

五 徒侍弘兵衛が来た

三太夫、紀州藩に遣わしていた徒侍かちざむらい、五谷弘兵衛ごやこうべえを呼び戻します。

この侍とは身分は低いのでありますが、主君の身辺警護を担う侍であります。馬には乗れませんので徒歩^{かち}での警護^{けいご}になります。

この弘兵衛もその一人。腕の立つ侍で六弦流^{むげんりゅう}剣術の使い手。六弦流とは身を屈めた低い位置からスツクと立ち上がった高い位置まで六段階の構えを持ち、基本的に刀を水平に繰り出す剣法。一般的に刀の構え方には上段、正眼つまり中段、下段があるが、これらをさらに細分化したもので、繰り出す刀の動きが六本の弦のように見える事から六弦流の名が付いている。人間の体は縦長であるため、水平に繰り出される刀は、敵の体を最も効率良く両断する事が出来る。しかも刀は体の中心に構えられており、刀は左右を問わず繰り出されるため、相手は刀の動きに幻惑される事になる。だが、この剣法は体力や腕の力、流れるような身のこなしが要求されるため、使い手は少ない。五谷を含め数人しかない。

五谷弘兵衛の先祖は三河五谷に在し、元々は農民、または漁民であったらしい。五谷一族には音曲に優れた者が多く、本業の傍ら祭りなどの時に皆を楽しませていたようだ。三河漫才、狂言のようなものと考えられる。家康もこの五谷一族の音曲が好きであったらしく、事ある毎に呼びつけ楽しんだと物の本に記述がある。家康は秀吉により関東に封じられたが、その時、家康に伴い江戸に出てきたようだ。大阪方との戦いの時には、五谷季八郎が陣中での音曲を担うため同道した。音曲に優れる者は当然、耳が利く。陣中深く押し入った敵の間に気付いた事が認められ、帯刀を許されたのが侍に取り立てられたきっかけであったそうだ。

「三大夫殿、お久しぶりでございます」

「おう、弘兵衛か。良く来てくれた。腕を磨いたと聞いておるが殿の侍として勤めてもらう事にした。良いな」

「殿は私の事をお覚えておいででしょうか」

「忘れる訳がなかるうに。二人が幼少の頃、良く喧嘩をしておった。おぬ

しの方が歳下のくせに、いつも食って掛かっておったが、おぬしはまるでいじめっ子じゃったな。ところで相変わらず上の者を、上の者とも思わぬ言動をしておると聞いたが、性格は変わっておらんのか？」

「はっ？ そんな噂が流れておりますのか？ 面妖な！ 真面目一方にござる。ただアーだコーだと言われますと無性に腹が立ってまいります」

「何じや、変わっておらんではないか。まー、良い。殿もそなたも、もう大人じや。以前のようなことはあるまい。早速じやが、おぬし着物を脱いでではなくれぬか」

「はっ？ 裸になれとの仰せですか。登城するなり裸になれとは解せませぬが。たとえ三太夫殿のご命令とは言え、訳をお聞かせただかぬ限り裸にはなりません。そもそもお城での裸はご法度のはず。承服できかねますっ！ このような事が続くようであれば、お役、御免被りたいっ！」

「相変わらずじやな。まー怒るな。話して聞かせるゆえ」

三太夫は、今までのいきさつ、家光が綾の事を好もしくは思っていることを、そして市中を散歩したがつていることを話します。

「綾殿とは例の狐の生まれ変わりでございますな。空を飛ぶとの事。紀州でも評判になっておりました」

「狐の生まれ変わりなどではない。教養も高く美しい女子じや。拙者ももつと若ければ……。残念じや」

「三太夫殿、三太夫殿！ その様に物思いにふけるのはお止めください。お立場、お年をお考え下さい。ましてや顔をはす上に持っていき、遠くを見やる姿、気持ち悪うござる。殿が綾殿と市中を散歩したいと言う気持ちしかと承り申した。拙者が警護する件も判り申した。だがしかし、裸になる理由が理解できません」

「弘兵衛、裸になるのが目的ではない。おぬしの着物が必要なのだ」

「着物？ どう言うことござるか」

「着流しで出掛けるにしても、まさか葵のご紋ではまずかろうが。おぬし

は殿と背格好も似ておる。おぬしの着物を拝借したいのじゃ」

「成る程。当家の紋は丸に九枚笹ですが宜しいのでしょうか。しかも、この着物、着古しておりますが。これでは余りにも……」

「葵以外であれば何でも良いのじゃ。それに着古しているからこそ良い。目立ってはまずいからの。他にも背格好が似通ったものは居るが、おぬしの着物が一番着古しておる。これがおぬしの晴れ着か。結構、つましい生活をしているようじゃな」

「余計なお世話でござる。ところで拙者は何を着れば良いのですか」

「なんと、これは一張羅か。他に持っておらんのか。良かろう。なんとかする。しかし、つましいのう」

「扶持が少ないのでござる。何とかすると申されても、このまま裸で待っている訳には参りませぬ。替わりのものを持ってきてください。それまではこの着物、お貸しする訳には参りませぬ」

「裸でいた方が涼しいだろうに。堅い事を申すな」

「何を戯けたことを。お城での裸はご法度。三太夫殿は相変わらず無茶苦茶を申しますな。紀州でも評判でございました。あの耄碌ジジー、好き勝手遣っている。何かという大殿のオシメを取り替えたのはこの三太夫とのたまう。そんなにオシメが好きならば取り上げ爺にでもなれば良い。

オシメ、オシメと五月蠅うるさくてかなわん。もうオシメーにして欲しいと。しかし、下手な洒落ですな」

「なに、紀州の連中が、そんな事を申しておるのか。しかし、おかしいな。紀州は拙者の故郷。竹林家は藩主からも頼られておる。紀州は確かに田舎者揃いだが、皆、品の良い連中だ。そのような事を申すとは信じられんな。では弘兵衛、誰がそのような事を申したか言ってみよ」

「まー、確かに紀州は質実剛健の気風。皆、気の良い人たちではあったし……。誰がと言われましても……」

「弘兵衛っ！ 白状せよっ！ 見え透いた事を申してっ！ 紀州が申しているのではなく、おぬしが考えている事であろうがっ！」

「判り申したか。まー、そう目を剥かずに。アツハッハー」

「笑って誤魔化すものではない。尾張が言ったと言われれば信じたかも知れんが」

「いや、申し訳ありませんでした。三太夫殿であれば、すぐに気が付くと思っておりますが安心しました。本気にして紀州に早馬でも飛ばされては大変でした。ところで早く着替えを持ってきてくださらぬか」

「まったく変わっておらん。おぬしにも困ったものじゃ」

弘兵衛の着古した着物は洗い張りします。弘兵衛は自分の着物よりも良い着物を手に入れます。紋は二重菱形十文字。本人、気に入っております。

「弘兵衛。綾殿と隠居に会わせよう。付いて参れ」

「いよいよ綾殿にお会いできるのですね。ついでにハンググ・ライダーなるものを見たいものです。駕籠の用意は如何がなされたのですか？」

「この暑いのに駕籠になんぞに乗っておれるか。徒歩じゃ。おぬしに合わせる。さー、参ろう」

弘兵衛、江戸は久しぶりです。あつちをキヨロキヨロ、こつちをキヨロキヨロ。歩きながらも落ち着きがない。特に若い女子とすれ違う時は、ジロジロ、ジロジロ、不謹慎極まりない。

「弘兵衛っ！ 見つともないではないか。拙者まで不貞の輩と思われる。背筋を伸ばしてサッサと歩きなさい」

「しかし、久しぶりですが江戸の女子は綺麗ですなー。浴衣の衣紋を広げて歩くのが流行っているようですね。中々、色っぽい。弘兵衛、堪りませぬ」

「いい加減にきなさい。綾殿に委細構わずお伝えいたすぞっ！」

「三太夫殿。そんなに綾殿に気を使われますか。珍しい事ですな。三太夫殿は人を人とも思わぬ配慮の無い方と存じていました」

「何を申すか。拙者は仏の三太夫と言われるほどの気のやさしい男じゃ。」

気を使いすぎて頭が薄くなつてしまった。さー、急いで参ろう」

弘兵衛、ちよつとからかう事にいたします。早足です。

「オイオイ、何もそんなに早足でなくとも良いであろうに。それでなくともこの暑さだ。ゆつくり参ろう」

徒侍は歩くのが商売。到底、三太夫は追いつけません。

「弘兵衛、先に歩いていくのは良いが長屋を知っておるのか」

そう言われてみれば聞いていない。しかし、そこは弘兵衛、素直に歩みを遅くはいたしません。

「急げと言つておきながら、今度は、ゆつくりですか。どうすれば良いのです。どうも三太夫殿は自己中心的でいけません。良い歳をしておりますながら、まだ苦勞が足りないのではござらぬか」

「何を申すかつ。わざと早足で歩きおつて。そもそも、あなたに苦勞が足りぬなどと言われるは片腹痛いわ。おぬしこそ、ただ毎日が楽しければ、それで良いなどとのたまりおつて。将来計画も何も無い。少しばかり腕が立ち、ほんのちよつと見栄えが良いからといって頭に乗るものではないわつ。こうなれば総てを綾殿にお伝え申す。良いなつ！」

「また、綾殿でござるか。たかが女子ではござらぬか。何かと言うと、綾殿、綾殿と。拙者の方が片腹痛いわ」

などと言ひ合いながら、やがて長屋に到着いたします。

ちよつと綾が入り口で水を打っております。

「綾殿っ！ 三太夫めにござる。今日は、誠に暑ーござるな」

「あらつ、三ちゃん、お久しぶりー」

すでに、三ちゃんであります。

「この前、お話した五谷弘兵衛を連れてまいつた。口は悪いが腕は立つ男じゃ。これっ、弘兵衛、綾殿に挨拶をせんかつ！」

「……」

弘兵衛、カーツと目を開き綾を見つめたまま微動だにしない。

「これっ、弘兵衛っ！」

「……あっ、さ、三太夫殿。如何致いたしました」

「何を申しておる。挨拶をっ！」

「そうであった。挨拶でござるな。ゴホン、ゴホン、あー、あー、本日は晴天なり……」

「何を口走っておるのじゃっ。早く、せいっ！」

「発声練習でござる。ほ、本日は、お、お日柄も良く、また、良く晴れた晴天で……。何と申しましようか、暑さ寒さも彼岸まで。去り行くカモメに行き先聞けば、信州信濃の蕎麦よりも、あたしやあなたの傍が良い……」
どうした訳か弘兵衛、支離滅裂。目は見開いたまま。凍りついたように動きません。顔は真っ赤。

「弘兵衛、如何致したっ！ 綾ちゃんの前で……。アーツ」

今度は三太夫が目を剥き固まります。

—— 綾ちゃんなどと呼んでしまった！

ご隠居は綾と呼びます。親しい長屋の連中ですら綾さんと、さん付け。さん付けを通り越し、一足飛びに、ちゃん呼びわり。家光公は、家光っちゃんと呼ばれても礼儀正しく常に綾殿であります。

—— せ、拙者とした事が何と言う事を……。綾ちゃんなどと呼んでしまった……。將軍御側付きの、このわしが……。なんと言う事だっ。厳格なる三太夫は何処に行ってしまったのだ……。このような軽率な言動。これでは、ご神君に顔向けが出来ぬ。この上は腹を搔っ捌いて……。いや待てよ。殿は、いつも同じではないか、たまには別の方法をと申しておった。しかし別の方法と言ってもな……。馬に蹴られて……。いや余り格好は良くないようじゃな。では海に飛び込んで……。これも駄目じゃ、軽すぎて浮いてしまう。如何いたそーか……。

三太夫、弘兵衛共に固まっています。

驚いたのは綾、

「二人とも、どうしたの？ 目を剥いちやって。それに顔が真っ赤。日射病かしら……。じっちゃまー！ この二人、部屋に入れてっ！」

固まった二人を部屋に入れます。三太夫は思案顔のままですが、目付きは戻りつつあります。

「綾殿、かたじけない。弘兵衛のみならず拙者までもが心配をお掛けしてしまっただ」

「アラッ、綾殿なんて。さっきは綾ちゃんと呼んでくれたのに。堅苦しいわ。綾ちゃんと呼んで」

「エッ！ 馴れ馴れし過ぎると怒ってはおらんのか」

「ヤダー、私は三ちゃんと呼んでるのに。家光ちゃんも綾殿なんて、まるで友だちじゃないみたいでピンと来ないわ」

「そうか、そうか、そうであつたのか。綾殿つ、救われた気持ちじゃ。これで方法を考えないで済む」

「方法って？ ネえ、何の方法なの？」

「いや、もう良いのじゃ。取り越し苦労だったのじゃ。馬に蹴られるのは、どーもな。良かった良かった」

「今日の三ちゃんて、変ね！ でも弘兵衛さん、まだ固まつてるわ。ちょっと心配だから、見てみるわ。弘兵衛さん、腕を出して」

弘兵衛、ぎこちなく腕を出す。綾は手首をつかみ脈をとります。

弘兵衛、綾の指が手首に触れると今度はブルブル震え出します。

「あらっ、脈は、ちよつと速いだけで問題ないのに、今度は震え……。どうしたのかしら？」

これを見ていた三太夫。しまった、もう少し固まつていれば綾殿に触ってもらえたのに、などと年甲斐もなく残念がります。

「綾殿、いや綾ちゃん。拙者には判り申した。弘兵衛の事は心配する事はござらん。こりや弘兵衛つ、そのような状態では、殿と綾殿の警護役は無理じゃ。ほかの者に替えた方が良いでしょう。そういたそう」

「さ、三太夫殿。せ、殺生な。この弘兵衛に、お、お、お任せください。

ちよつと暑氣中しよきあたりでござる。今日のところは、この辺でお暇いたした方が
良いのでは……。如何か」

「隠居、綾ちゃん。弘兵衛が、あー申しておる。ゆつくり話も出来んか
つたが散歩の日取りが決まったたら、またお邪魔するゆえ、よろしくな。で
は失礼つかまつる」

二人はお城に向かいますが、弘兵衛は半病人状態。

「弘兵衛。たかが女子一人に如何いたした。おい、如何いたしたと申して
おるのじゃ。口も聞けんのか。たわけものが。普段、偉そうな口を利きお
つて、なんじゃその様は。綾殿に呆けた顔をさらしおつて。あれでは、も
う口も聞いてもらえんじやろう。可哀想にな……」

「まことでござるか。綾殿は、もう口を聞いてはくれませぬか。如何いた
そう。三太夫殿、何か良い手立てはござらんか？」

三太夫、弘兵衛が綾に一目惚れしたことに気がついております。

「手立て？ 何の手立てじゃ。おぬしは先ほど拙者の事を耄碌ジジと申
したではないか。耄碌ジジにものを頼むおぬしは阿呆じゃな」

「何と申されても構いませぬ。あのように綺麗で理知的な女性を初めて知
りました。殿も三太夫殿も綾殿、綾殿と申す訳が判り申した。私めもお仲
間に入れてもらえませぬか。しかし、綾殿は殿のことを家光ちゃん、三
太夫殿を三ちゃんと呼ばれる。羨ましいですな。拙者は弘兵衛さんでご
さる。弘兵衛ちゃんとか呼んでくださらぬものかのー」

「無理じゃ、無理じゃ。それは無理と言うもの。多分、今ごろはおぬしの
事を呆けた侍としか思っておらぬはずじゃ。弘兵衛、可哀想にな。これ
ばかりはこの三太夫も如何ともしがたいことじゃ。まー、諦めるのじゃな」

三太夫、誇らしげに鼻をピクピクさせます。弘兵衛は、うなだれたまま
お城に到着し、早速、二人は家光の所に参ります。弘兵衛にとつては久し
ぶりの対面。

「おー、戻ったか。三太夫、大儀じゃ。ところで弘兵衛、久しぶりよのー。

この度の件…… どうした元気がないが。顔付きは昔の弘兵衛であるが、まるで腑抜けじゃな。これっ！ 余の話を聞いておるのか。弘兵衛っ！」
三太夫は意地悪っぽく笑っております。

「三太夫、弘兵衛は如何いたしのじゃ。何かあったのか」

「殿、弘兵衛は紀州住まいが長く、江戸での生活が合わないようでございます。このままでは体を壊すのは必至。紀州より呼び戻しました、この三太夫が間違っております。弘兵衛のことを考えれば再び紀州へ遣わした方が良いでしょう」

三太夫も意地が悪い。ここぞとばかりにからかいます。

「そうであったか。済まぬ事をしたようじゃな。では紀州に戻るか」

「滅相もございませぬ。江戸は生まれ故郷にございます。やはり江戸は落ち着きます。三太夫殿は、根も葉もない戯言まじしやうを申しております」

二人が声を揃えて言います。

「では、何故、元気がないのじゃ」

「それはー、いろいろと事情がございまして……」

「事情？ 遠慮はいらぬ。余は、そちの幼友達じゃ。構わぬ、申してみよ。力になるぞ」

三太夫、クスクス笑っております。

「殿、ありがたきお言葉。弘兵衛、感じ入りましたでございます。しかし、誠に言いにくい事でありまして……。実は、私も弘兵衛ちゃんと呼ばれたいなどと……」

「何と申した。弘兵衛ちゃんとなっ！ おー、判ったぞ。綾殿か。そうかそうか、そちも綾殿に心を奪われたかっ！ ワツ、ハッハー！ いやー、これは愉快じゃっ」

「愉快ではございませぬ。三太夫殿は絶対に無理と申されます」

「なんじゃ、三太夫、そのような事を申したのか。弘兵衛が可哀想ではないか」

三太夫、面白くて仕方がありません。

「殿、弘兵衛を長屋に連れて参りましたところ……」

三太夫、事の仔細を話します。もともと自分が固まった事は省きました
が。

「そうであったか。三太夫が申す事にも一理ある。綾殿は余のような知性
あふれるものを好むのじゃ。そのような醜態を見せたとはな—」

自分が沢庵片手に一升徳利でグビグビ。くだ巻いた事は忘れている。

「殿っ！ 何とか執り成してくださいませぬか」

「こればかりはな—。確かに余は征夷大將軍ではあるが、綾殿に、そちを
友たちと思えとはな……。こればかりは如何ともし難い事じゃな……」

「あい判り申した。殿っ！ では例の件を綾殿にお伝え申うします」

「例の件？ 何じゃ、例の件とは」

「殿が幼少のみぎり、拙宅にお泊りになった事がございましたが、まさか
お忘れではありませんせぬな—」

「お—、覚えておる。汚い家じゃった。しかし、あの時は楽しかったのう。
寝ていると何やらゴソゴソ動いておる。飛び起きるとチーチー鳴いておる。
そちを起こすと、なんだヤモリかと申してまた寝てしまいおった。月明か
りで見ると、ヤモリは床の上で足を広げ、目をまん丸にしてジツと余を見
ておった。良く見ると可愛いものじゃった。しかし、部屋の中におけるのに、
何故、月明かりが入って来るのか不思議でな。見上げると壁土が崩れて穴
が開いておった。壁の穴から見える綺麗な月。子供心にも風情を感じたも
のじゃ。そう言えば、あの穴はふさいだのか、弘兵衛」

「余計なお世話でござる。私がお忘れではありませんまいなと申すは、翌朝
の件でござる」

「翌朝？ まさか例の件か。弘兵衛！ あの事は死ぬまで口には出さぬと
約したではないか！」

「何を申される。約す代わりに礼をするとおっしゃったのはどなたでござ
ったか。ただ今の余りにも理不尽な仕打ち。弘兵衛、もう我慢がなりませ
ぬ。私が目を覚ましますと、殿は床の上で呆然としていましたな。見ると、

まるで江戸湾のごときありさま……」

「弘兵衛！ 江戸湾とは言い過ぎじや。せめて不忍池と言ったらどうじや。余りにも大袈裟じや！」

「どちらでも同じ事」

三太夫、イライラしてきます。

「弘兵衛、殿は、どうじやつたのじや。じらさずに話したらどうじや」

「弘兵衛、二十数年前のことであろうが。もう良いであろうに」

「いえ、良くはござらん。私めが綾殿にお伝えする事とはオネシヨでござる。二十数年前であろうが百年前であろうが、殿がオネシヨをした事實は事実として未来永劫、消えるものではござりませぬ。綾殿に対する弘兵衛の切ない思いを知りながら、このような理不尽な仕打ち。弘兵衛の心は乱れております。何を仕出かすか己にも判りませぬ。お覚悟召されよ！」

何とも総てが大袈裟。

「判った、判った。吊り上げた目をそろそろ下げたらどうじや。綾殿には、それなりに伝える」

弘兵衛、急に元気になります。何とも単純な男であります。

「三太夫はオシメ。弘兵衛はオネシヨか。まったく堪らんな。どうなっておるのじや、余の人生は……」

家光、俯いてしまいます。

お城のゴタゴタなど何処吹く風。長屋ではご隠居と綾が話しております。「綾、あの坊主じやが、最近出歩いていないと思っておったら酷い水虫とのことじや。気取りおって、夏の暑い中でも足袋を履きおる。しかも面倒と申して何ヶ月も洗わん。水虫になるのも当然じや。とは申せ可哀想じや。何とかならんか」

「水虫ねー」

現代においても水虫の特効薬は開発されていません。

「判ったわ。結構効き目のある直し方、知ってるから遣ってみるわ」

お寺に行くのは初めて。お寺の名前は壇悟山満福寺。聞いただけでゲツプが出そうであります。南大門には二人の仁王様。門を抜けると右手に鐘楼。参道には石畳が敷いてあり、その前方には木立に囲まれた立派な本堂。どう考えても、あの坊主には全く似合わない雰囲気。

綾は、寺に来る途中で治療薬になる植物を採取しています。田んぼの畦道などに生えているギシギシという名の植物。葉は濃い緑色で二十センチ程。根っこは生姜のようで、この根をおろし金でおろし、お酢と混ぜます。これを患部にタツプりと塗ります。後はガーゼを当て包帯、またはバンソウ膏で保護します。化膿しただした水虫にも効果を見せます。

綾は、この治療法を曾祖父から聞いていました。

「こんにちはー。クソ坊主は居ますかー。綾でーす!」

この寺、立派な寺にも関わらず小坊主も居ません。あの坊主が一人で切り盛りしています。どうも本堂にはいないようです。庫裏の方に行き声を掛けます。

「クソ坊主は何処ですかーッ!」

「こりゃーっ! クソ坊主とは、どう言うことだ!」

「あつ、居た、居た。どうしたの寝転んだりして。仏に仕える身でありながら不謹慎よ!」

「何を言うか。足が痛くて、こうしている以外にないのじゃ。しかし大声でクソ坊主、クソ坊主と言うものではないっ! わしにもちゃんとした名前がある」

「だって、じっちゃまは、いつもあのクソ坊主って呼んでるわよ」

「まったく。あのクタバリ損ないめ、そのように言っているのか。今度会ったら只じやおかん。わしの名はな満海まんかいというのじゃ」

「寺の名前も変だけど、クソ坊主の名前も変ね」

「こりゃ、そのクソ坊主は止めてくれ。して、何の用じゃ?」

「何言ってるのよっ! じっちゃまが、クソ……じゃなくて……満海さん

の水虫が酷いから見てやれって言うから来てあげたのよ。足見せて」

満海、足を見せませす。

「汚い足！ それに膿んでるじゃない。これは酷いわ。足、洗った事あるの。お酢は何処？」

満海が戸棚を指差します。綾は、ギンギシをおろし、お酢と混ぜませす。これを水で洗った患部に塗ります。満海、飛び上がります。

「い、痛いっ！ 沁みるーッ！ 綾、何を塗ったのじゃ。足がカツカしてきたぞー！」

「それで良いの。ギンギシが効いてる証拠よ。もっとカツカしてくるわよ」
「ギンギシ？ 畦道に生えているあのギンギシか。あれは馬も食わぬぞ。

あんなものが効くのか？」

「そうよ。成分が強いから食べないのよ、きつと。……現代医学で、このギンギシの成分を抽出し効果を調べるべきね。特効薬が出来るかも知れない」

「何をブツブツ言っておるのじゃ。あれあれ本当にカツカが増してきたぞ。凄いのじゃな。何となく効くような気がしてきたわ」

満海、コックリコックリと居眠りを始めませす。綾は部屋を見渡ませす。余程、足が痛かったと見えて散らかり放題です。それに食事も取っていない様子。部屋を掃除し、飯を炊きだませす。

「〆隠居は、綾の帰りが遅いので気になります。

「遅いのう。何かあったのじゃろうか。まさか、あのクソ坊主、綾に手を……。いや、そんな事はない。では、途中で事故でも……」

気になりますと、益々気になるもの。寺へ行くことにしませす。

「おーいっ！ 誰か居るかーっ」

「あれ、じっちゃま。どうしたの」

「帰りが遅いので気になってな。いや、無事であったか。どうじゃクソ坊

主は？」

「今、寝てる。痛くて眠れなかったんじゃない。それにご飯も食べてないみたい。考えてみれば可哀想ね。一人で、このお寺を取り仕切るなんて大変だと思わ。体を壊しても誰も気が付かないわ。その点、長屋って良いわね。ちょっとでも何かあると、五月蠅いくらいに世話をやいてくれる……。今日は、じっちゃまとお寺に泊まる事にしたわ。もうすぐご飯も出来るし。ねっ、そうしようよ」

ご隠居、綾の優しさに目頭を熱くいたします。坊主を起こし、三人での夕飯。満海も嬉しくて仕方がない。しきりと鼻を嘍すります。そして目を押さえます。

「あら、どうしたの。鼻をグスグスさせたり、目を押さえたり。今度は風邪でもひいたの」

「いや、グスン。風邪などひいたのではない。グスン。ただな……。グスン。ただ……」

ご隠居も一緒にグスン、グスンを始めます。

食後、三人の談笑が始まります。満海が、この寺の由来を話し始めます。「この寺はな、由緒ある寺なのじゃ。今は拙僧一人じゃが、以前は大勢の坊主が居つての。学問を志す者、経典を研究する者、悟りを得るため修行に励む者……。それはそれは活気溢れる寺じゃった。

寺の開祖は満珍和尚といつてな、唐のお人じゃった。和尚を慕って大勢が集まった訳じゃ。和尚は人間の性さがや業ごうについて深く学究されておった。遠く天竺にも修行に行かれてな。悟りを開くには、この性と業を捨て去らねばならぬとお考えになった。それはそれは過酷な修行を積まれたお方じゃ。捨て去ろうと思う事自身、捨て去っていない事。さらに性や業を持つているからこそ人間であり、己の存在、つまり人間としての存在がある限り、悟りは開けんと気付かれてな。人間である事を捨てさろうとなさったのじゃ。何も読まず、何も見ず、何も聞かず、何も食はず……。ただ、

ひたすら無我を求めなされた。一、二年経ったある日、和尚がカーツと目を見開き、大声を出された。我、悟ったり！そして静かに目を閉じられた。座ったままの成仏じゃ。綺麗なお顔じゃった。

和尚は今も本堂に安置されておる。ところが和尚を慕い集まってきたものたちが、余りに凄まじい修行を目の当たりにしたためか、己の弱さに気付いてしまったのじゃ。あるものは、和尚が安置されている本堂に近づくのさえ恐ろしがってな。また、あるものは、毎夜、和尚が説教に現われると申してな、挙句のはてには気が狂ってしまう始末じゃ。そうこうしている内に、皆、寺から出て行ってしまった……。そして拙僧一人が残った」

「満海さんは、恐くないの」

「拙僧は全く恐くはなかった。満珍和尚にお会いしたのは、まだ八つの時じゃった。和尚が成仏されたのは、それから五年後。拙僧は和尚が修行されている姿を、ジーツと見ておった。来る日も来る日も見ておった。当初、厳しいお顔だったが、日が経つにつれ柔和なお顔になっていかれた。そのお顔の変化に驚きを感じてな。大声も聞いた。澄んだ胸の底に伝わるお声。心が洗われる思いじゃった。人間の性、業と言うものは、強く人間を支配するものらしいと、おぼろげながら察することは出来た。しかし、この満海愚僧は、この年になった今も、人間の性、業について判っておらんのだ。ただ仏にお仕えし、人々のあの世への旅立ちを見守るだけじゃ。生臭さ坊主、クソ坊主と言われておるが、それで良いのじゃよ」

「満海。たまには真面目な事を話すな。水虫も良いことをするわな。ところで足はどうじゃ」

「まだカツカしておるが、痛みは無くなったようじゃな。綾、ありがとよ」

外は、綺麗な月夜。涼しげな風が吹いております。綾は縁側に座り足をブラブラ。何となく幽玄な敵かな気持ちです。

—— 満海さんも、なかなか良いね。酒ばかり呑んで額をテカテカさせて、くだらない事ばかり喋るけど、内面は結構、繊細！私も筋が通った

毎日を送りたいわ。タイムスリップのお陰でいろいろな人に会えた。貴重な経験ね。

大トンビを作ってからと言うもの、佐吉は伝統的な大工仕事の片手間に何かと新しい細工物、からくり物を作りたくって仕方がありません。

——夏は暑いんだ。これは当たり前のこと。そこでだつ、夏を涼しく過ごせる工夫だな。涼しくするには、風か水だ。怪談話じや駄目だ。ちゃんと涼しくならなけりゃな。何か無いかね、面白い工夫は。

時間があると頭を巡らせます。

——屋根に水をまき続ければ家は冷えていく。しかし、いちいち桶おけで水を運んでいたら参っちゃう。水を高いところに持つていく算段が出来なきや無理だな。やはり、水車だ。水車の下の部分が大川に入れる。川の流れが水車を回す。水車の羽の部分を箱桶のような形にする。テッペンに來れば桶から水がこぼれる。そこに大きな箱を用意する。水が貯まっていくな。その箱から樋とびでもつて家の屋根に水を導く。水車は、大きければ大きいほど高いところに汲み上げられるな。屋根の上の樋には所々に穴の開け、そこから水が出て行き家全体が水で冷えていく。良いね、なかなか。しかし、お城のテッペンに水を持つていくのは無理だな。そんなに大きな水車は幾らなんでも作れねえ。ま、考えるだけでも面白れーや。

理屈的には可能であります、作り出すほど佐吉は無分別ではありません。自分で考え、フムフムと納得し、ニヤニヤ笑うだけであります。

——さてよ、水が家まで来るのなら風も起こせるはずだ。水車の応用だ。水車の軸を長くして、その先に竹とんぼだ。竹とんぼを廻せば風が起きる。

佐吉は、大きな竹とんぼの図面を描きだします。

「佐吉つあん、居るっ！」

綾が遊びにきました。

「おー、綾さんかっ！ 何か用かい」

「上がってイイー！」

「遠慮はいらねーよっ！ 散らかってるけどな」

「あらっ、何してるの？」

佐吉が図面を見せます。

「設計図ね。判った。扇風機だっ！ へー、凄いな！」

「綾さん。センプーキって何だい？」

—— いけない。つい口を滑らしちゃう。

「あ、あのね。今、私が考えた名前なの。千の風を起こす機械、だから千風機って名前付けたの」

「千の風か。良いな。千の風。でもな、理屈では動くはずだけど、実際に作るのは無理なんだ。無理でも考えるだけでも楽しいんだ」

綾は、一所懸命話す佐吉を見て、ちよつと悲しくなります。

—— そうよね、この時代には動力が無いからね。でも、教えちゃだめだし……。

「ねえ、竹とんぼ作ってよっ！ 子供の頃を思い出して一緒に遊ぼうよっ！」

「ははー、綾さんは俺より年上のくせに、まだ子供だな。よっしゃ！ 作ろうか」

竹とんぼなど、佐吉にとっては朝飯前。二人で竹とんぼを飛ばし暗くなるまで遊びます。

西の空には夕焼け雲。木立からは蝸の声。カーナ、カナカナ……

夕暮れ時のひと時。夕焼けに染まる二人です。

そこにご隠居がヒヨコヒヨコ参ります。

「やっぱり佐吉の所だったか」

「師匠、どうしたんですか、こんなに遅くに！」

「こりや、師匠と呼ぶなど申しておるだろう。隠居と呼べ。何が、こんなに遅くじや。夜の女子の一人歩きは物騒じや。綾が、なかなか帰ってこから心配で捜しておったのじや」

「じつちやま、これね、佐吉つあんが描いたのよ。凄いでしよう」

図面を見せます。隠居は、昔宮大工の棟梁。図面を見るのは慣れていません。からくりを理解します。

「でもね、こんなに大きな水車を作るのは無理なんだって。この風を起こす機械も水が落ちる力を利用しないと廻らないんだって。動かすものがあれば涼しい風が吹くのにね」

綾は、ちよつと目を潤ませます。

「佐吉つあんて、頭良いわね。大トンビも作っちゃうし、もうちよつと遅い時代に生まれてくれば良かったのに……」

佐吉は、綾が言っている事が良く理解できません。隠居は何となく理解できます。

「さつ、綾。そろそろ帰った方が良いじやろー。佐吉、また長屋に遊びに来い。飯でもご馳走するぞ」

帰りしな、綾は向こうの世界には、いろいろな動力があることや扇風機、クーラーなどの話をします。判っているのかどうか判りませんが、隠居は、おー、そうか。おー、そうかとニコニコしながら相づちを打ちます。綾は、隠居の周りをスキップしながら長屋へと急ぎます。

六 三人は、おむすびを作った

「三太夫、三太夫は居らんか！」

「へへー、何でございましょうか」

家光がムスツとしています。

「殿、今日も暑ーございますな。では、三太夫は戻ってよろしいでしょう

か?」

「また、皮肉を言いおって。どうなっておるのじゃ?」

「はっ、何が、でございますか」

「判っておるくせに、とほけるものではない! 三太夫は、益々底意地が悪くなってくるな。先が思いやられるわ。散歩じゃ、散歩。何のために弘兵衛を呼び戻したのじゃ。壁の穴をふさぎに来たのではあるまい! 余もたまには市中をノンビリ歩いてみたいのじゃ! そちばかりが気楽に長屋に行きおって」

「この三太夫、手抜かりはございませぬ。弘兵衛と共に下見に行つてまいりました。明後日にも二丁遣つてみようかと考えております」

「そちだけで考えても仕方あるまい。主役は余じゃ。余の心構えも聞かず勝手に日時を決めてもらつては困る」

「恐れ入ります。しかし、お言葉ではござりませんが、殿のご予定は、この三太夫が決めております。と、言う事は、一々、聞く必要がないことになりまします。もし、明後日がどうしても都合が悪い、との事でありましたれば、一年後になりますか、それでも宜しゅうござりまするか?」

「まする、ますると五月蠅いのう。一年後などと言いおって、余をいじめるともりか。明後日は、ちょうど都合が良い日じゃ」

「ちょうど都合が良い? はて、何故でござりまするか。別に明日でも、明々後日でも宜しいのではござらぬか。何故、明後日が都合が良いのか、さっぱり判りませぬが」

「また屁理屈かっ! 疲れる男じゃ。ところ、弘兵衛は如何いたしておる。顔を見せぬが」

「殿、あの男にはホトホト困っております。心を奪われた綾殿に醜態を見せ、しよげかえっておりますが、殿のお言葉を聞いた途端、元気になるおって。多分、今もお城の腰元、一人一人と会つておると思われます。あの腰元は目が良いとか、体が良いとか、あの腰元は鼻が大きすぎるとか、そんな事ばかり言っております」

「そうか。気が多いのじやな」

綾殿に伝えておこう。家光、機嫌が良くなります。

さて、当日であります。家光、弘兵衛の着古した着物に腕を通し、着流し姿でウキウキしております。弘兵衛は上等な着物に満足しております。

そして、三大夫の訓示が始まります。

「弘兵衛、良いなっ！ 徒侍の本領を發揮する時が来たのじや。万端抜かりなくお勤めを果たすように。立派に勤め上げたあかつきには、子々孫々、末代まで誉れを受ける事になるのじや。これら総てはおぬしの心掛け次第じや。仮に、しくじった時には命が無いものと思えっ！」

なんとも大袈裟であります。まるで戦場に向かうが如き言いよう。

「三大夫殿、ご心配は無用にごさる。万一、突発事故が起こった場合には、まず、綾殿をお助け申す。綾殿を安全な場所にお連れし、その後、殿をお助け申す。間に合わなかった場合には、お互いに諦める事にいたせば宜しいかと考えております」

三大夫、不安になってきますが家光は上の空。

家光と弘兵衛、ソソクサとお城を出ます。顔つきは二人とも悪くはありません。着流しに帯刀。見た目には、閑を持って余した旗本崩れの雰囲気があります。どちらかと言いますと、弘兵衛の方が良い着物を着ておりますので、扶持は多いように見えます。しかも市中の一人歩きにも慣れておりますので、落ち着いた感じですよ。一方、家光は着流しで、しかも一人だけのお供。このような状態で江戸の街を歩いた事はありません。複雑な気持ちであります。ノビノビとした開放感を味わっておりますが、それと同時に濡れたジメジメした所を、裸足はだしで歩いた時に感じるヌメヌメとした悪寒にも似た感じがします。なんとも不気味な不思議な気持ちであります。実に落ち着きません。自然、周りを気にしながらぎこちなく歩きます。まるでちよっと足りない人間のようであります。

通り過ぎる女性も、あらまー可哀想にと哀れみの目を向けたり、かと思えばクスクスと笑いながら振り返ったりします。

「殿、いくら慣れてないからといって、そうオドオドした歩き方はお止めください」

「弘兵衛、殿などと呼ぶな。余は、……いかんいかん余などと言ってはいかんのじやな。拙者はオドオドなどしておらん。弘兵衛、拙者の名前を決めていなかったが、三太夫は何か言ってはなかったか」

「いえっ別に。三太夫殿、名前を決めるのをお忘れになったようでございますな。如何いたしましたでしょうか」

「如何と言われてもな。では考えろといったそう。拙者の幼名は竹千代じや。何かないか！」

「竹蔵では」

「ごつい感じで嫌じやな」

「竹助」

「軽過ぎるな」

「竹平」

「何となくイヤラシイのう」

「いやお待ちください。思いつくまま申してみましよう。竹一郎、竹二郎、竹三郎、竹四郎、竹五郎、竹六郎、……」

「次は、竹七郎で、竹八郎、竹九郎、竹十郎か。幾つまで言うつもりじや。他にも竹衛門、竹之助、竹之丞とかあるであろうが」

「ではご自分でお決めなされ。弘兵衛は面倒になってき申した。役者でもあるまいに、竹之丞とは、チャンチャラ可笑しいでござる」

「困ったのー」

ちょうどその時、売り声が聞えてまいります。

「竹やー、竿竹ー……」

「おー、良いではないか、竹弥にいたそう」

ま、こんなもんであります。何とも安易。

「して、竹弥殿。苗字は如何いたしますか」

「徳川ではまずいのう。何でも良いわつ。徳山で良い」

竹弥と弘兵衛、長屋に向かいます。

江戸の夏。陽は高く、今日も暑い日になりそうな様子でございませう。

この時代、オハヨーの言葉はありません。日の出と共に生活は始まりますし、商人、職人は仕事に就いています。早いのが当たり前なのです。

綾とご隠居、とつくに朝餉を済ませ、通りに打ち水をしながら二人の到着を待つております。

「弘兵衛、おぬしは歩くのが早いのが早い。余、ではない、拙者は剣術、乗馬、弓など鍛錬はしておるが、歩く事に関しては適わぬな。もう少し歩みを押さえろっ！」

「何を申しますかっ！一刻でも早く綾殿にお会いになりたいのでござらぬか」

「それは、おぬしの方であろうが。血相が変わっておるぞっ！」

「滅相もない。竹弥殿こそ顔が緩みつぱなしでござりまするぞ。すれ違ふものたちが怪訝な目付きで見えております。シャンとしてくださらぬか。そもそも、今回の一件は、竹弥殿の勝手な我がままが原因でござる。そもそも……」

「弘兵衛。おぬし三太夫に似てまいったな。そもそも、そもそも……。その内に何かあると腹を出すのであらう。先が思いやられるわっ」

「竹弥殿っ！言つて良い事と悪い事がござらうが。選りによって、あの三太夫殿に似てきたとは。考えただけでも虫唾むしずが走り申す。死んでも、あのお方に似るつもりはござらんっ！気分が悪くなり申した。一人で行かれまするか。弘兵衛、このまま屋敷に戻つても良いござるが……」

「しかしな弘兵衛、そのような意地悪な言い方もそっくりじゃがのう。も

し、このまま帰ったりすれば、あの三太夫が大変じゃぞつ。死ぬまでおぬしに付きまとうかも知れん。まー、先にあの世に行くのは三太夫であろうが。堪らんぞつ！ よーく考えた方が良いぞ」

「……」

「どうじゃ」

「御もつともにござる。気色が悪うござるな」

二人は大声をあげて笑い出します。周りの人たちが振り返る有様。三太夫を出汁にウキウキした気分になります。

「話は変わりますが竹弥殿、拙者が綾殿にゾツコンのようにお考えのようでござるが、この弘兵衛、女子には不自由しておりません。確かに綾殿は素敵な女性であり、ほんの少しばかり心を奪われたのは事実。言い訳がましく聞こえるかも知れませぬが、先だつての狼狽は、綾殿が、どことなく変わった雰囲気を持つておつたからの事。今日は、そのような事はござらん」

家光、ニヤニヤしています。

「綾殿の容姿、物腰、言葉遣いなど、他の女子たちとは異なるように思います。綾殿と一緒に居ると何故か妙な気持ちになります」

家光も同じような感想を持っています。江戸幕府が二百年先に無くなることを知っている綾です。しかし、触れてはならない事と思っています。

「そうか。拙者も変わった女性だとは思っているが、もつて生まれた性格ではないか。魅力ある女性じゃ。心引かれるものがある。ところで……おぬしの綾殿に対する思いは一時的なものだったのか、そうは思えぬが」

「ワツハツハー、今日は軽くあしらつて見せます。考えを変えることになりませぬぞ」

何となくぎこちない笑い方があります。

人間、ある事にドツプリと漬かる恐れがある場合、無理に強がりを行うことがあります。はたして弘兵衛の場合はどうなのでしょううか。

「たのもー。ご隠居は居るかっ。徳山竹弥が参った。弘兵衛も一緒じゃっ！」

「この声を聞いたご隠居と綾、顔を見合わせ??？」

「じっっちゃま、徳山竹弥って誰？ 弘兵衛さんの知り合いのようね」

「いや、わしも知らん名前じゃ。誰じゃろーな。へいへい、お待ちください。ただ今、参ります……」

「ご隠居が入り口に行くとか家光と弘兵衛が立っている。

「何でござりますか、殿でありませんか。お待ちしておりました。ところで徳山様はどちらにいらっしゃるのですか」

「ご隠居、拙者が徳山竹弥じゃ。どうじゃ、良い名前であろう。道すがら考えたのじゃ。綾殿は？」

「ご隠居、察しが良い。成る程、お忍びじゃから名前を変えたのか。すぐに気が付きます。

「綾ーっ、殿がお出でじゃぞー！ 弘兵衛殿も一緒じゃ」

「いらっしやいっ！ なんだ徳山竹弥なんて言うから誰かと思っちゃった。そうかつ、家光っちゃんじゃ、まずいものね。今日は竹弥ちゃんね。今朝も良い天気！ 江戸をブラブラするなんて素敵。あら、弘兵衛さん、体の具合はどう？ この前は訳が判らない体調だったみたいだけど」

「……」

「弘兵衛、何とか申せっ！ 軽くあしらうと申したは誰じゃった」

「殿っ！ いや、竹弥殿、その事は……」

「あら、何をあしらうの？ 弘兵衛さん、まだ体調がおかしいんじゃない」

「ご心配無用。だ、大丈夫でござる。天気が良くて良かったですな」

散歩と申ししましても今で言えば遠足のようなもの。兎に角、昔の人は良く歩きました。江戸から大阪、京都、九州まで歩いて行く訳ですから凄いもの。

「で、今日は何処に行くの？ 家光っ……、そうか、今から新しい名前で呼んだ方が良いね。竹弥ちゃん……、待ってよ、竹ちゃんの方が良いな。ねえ、竹ちゃん、綾は何処でも良いんだ。三人で江戸をブラブラ。江戸ブラね！」

緊張しきりの弘兵衛、この言葉で力が抜けます。

「江戸ブラでござるか。綾殿は変な言葉を使いますな。私も負けずに考えましょう。今日は、お寺と神社に参ります。まず、徳川家の菩提寺であります増上寺を詣で、その帰りに愛宕神社に参ります。先に遠い方の増上寺に行った方が良いでしょう、昼餉ひるげは、愛宕山の頂上で取りたいと思っております。如何でございますか」

「弘兵衛さんに任せるわっ。弘兵衛さん、また暑氣中りにならないように気を付けてね」

「だ、大丈夫でござる。先だつては江戸に戻る旅の疲れが出ただけでござる」

「弘兵衛、本当にそれだけか。他に理由はなかったのか」

「竹弥殿、要らぬお世話でござる。綾殿、この竹弥殿は子供の頃我が家に泊まりに来た事がござるが……」

「弘兵衛殿っ！ 旅の疲れが取れて良かったのー。そうじゃった。旅の疲れだけであったなー！ アッハッハー」

ぎこちない笑い。人間、弱みを握られたくないでもあります。

「綾殿。つきましては、昼餉を何とかして頂けないものでしょうか」

「あら、じっちゃま、どうする？」

「そうじゃな、飯はあるがなー。おにぎりじゃな。おにぎりじゃ」

四人は部屋に入ります。

早速、おにぎり作りです。こうなれば家光も一緒に作ります。

「しかし、何だな。おにぎりとは難しいものじゃな。掌にくつついてどうしようもないな」

「竹弥殿、ですから、まず手に水をつけると申したではありませんか。人

の言うことを聞かないから、そのようになるのです」

「弘兵衛さん。人の事は良いですから、そのような平べったいおむすびではなく、ちゃんと三角に作ってください。それに、昆布の佃煮があるのですから中に入れてください。平べったいから中に何も入れられないじゃないですか。じつちやまを見てください。美味しそうなおむすびを作っていますよ。そつ、そんなにオカカに醬油をかけては駄目です。私は、二人が作ったおむすびは食べません！」

「綾殿、拙者も拙者が作ったおむすびは嫌じゃな。それに弘兵衛のは、もつと嫌じゃつ！」

「駄目です。二人が作ったものは、ちゃんと二人で食べてください。じつちやまが作ったおむすびは私がいただきます」

おむすびが出来上がりました。沢庵と一緒に竹の皮で包みます。

芝の増上寺に向かいます。

家康が江戸入府し菩提寺としたお寺です。境内の三解脱門さんげだつもんが有名で、徳四年の創建とのこと。普段であれば大勢のお供を連れての参拝ですが、今日は、たった三人です。家光を知っている坊主たちにも会いますが、着古した着流し姿の家光に気付く坊主は居りません。いくら綾と一緒に顔は緩みっぱなしとは言え、本堂では真面目な顔で焼香いたします。お賽銭の時に、三太夫から借りてきた財布を出します。家光は財布など持った事がありません。珍しそうに財布を眺めながら、賽銭を出します。

綾は、コンクリート作りになった増上寺は知っていますが、きちんと木造のままの増上寺に驚きます。やっぱり、お寺は木造じゃなくつちや駄目ね。素敵！ 既に三百年以上経っているだけあるわ。威厳があつて良いな！ 一人で感心しています。

弘兵衛は、参拝後、境内の物売りをからかっています。

さあ、次は愛宕山です。

道すがら、どうしても、この三人は目立ちます。

綾はキリツとした目鼻立ち、肩までのびたストレートな髪の手。浴衣姿で軽やかな足取り。他の女性とは、どことなく違った雰囲気です。

家光は着古した着物姿とは言え、やはり一味違います。弘兵衛も武道家としての引き締まった体付きの中に、生まれながらに身に付けているしなやかな身のこなしを持っています。黙ってれば、それなりに目を引きまです。それに、二人とも見栄えのする顔つきをしています。

綾は、すれ違う男連中の目を、二人は女性の目を集めます。人に見られている事が判りますと何となくウキウキするものであります。

三人とも楽しくて仕方がありません。

「ねー、弘兵衛さん。さっき、竹ちゃんが泊まりに来た事があるって言ってたわよね。なんだか急に、竹ちゃんが話を止めたみたいだったけど……何かあったの？」

「い、いや。何もござらん。ただ泊まりに来た事があるとお話ただけでござる。竹弥殿っ、そうでござるな。綾殿は竹弥殿が、急に私の話を止めたように思っておられるようだが、竹弥殿は急に止めたのでござるか」

「い、いや、急に止めたりはしなかつたぞ。綾殿、拙者が泊まりに行った時、別に何も起こってはいませんで。綾殿の考えすぎでござるよ。アッ、ハッハー！」

綾は、この二人何か隠しているなど気付きます。しかし、どうせ大した事ではないわねと二人納得いたします。

愛宕山に向かう道々では、既に九ツに近いと言うのに、地方に下る旅人や江戸に上る旅人とすれ違います。下る者の衣服は、まだ綺麗ですが。上る者の衣服は土埃でくすんでいます。しかし、疲れきった顔つきの中には、何かホツとした表情が浮かんでいます。

—— そうよね、新幹線に座っていれば良いと言う訳じゃないんだもんね。信じられないわ、何処に行くにも歩いていくんだから。大阪だって駕

籠や馬を使っても何日も何十日も掛かるんだものね。急な知らせの時には、早馬や早駕籠を使うらしいけど、伝わるまでに何日も掛かる。現代に比べれば何十倍も時間が掛かってしまう。世の中の変化のスピードは現代よりもはるかに遅かったのね。だからと言って平均寿命が長かった訳でもない。むしろ現代人の四分の三か半分くらいしかなかったはず。双曲円錐体状スパイラル理論で正しいのね。世の中の変化のスピードは遅かったけど、寿命は短く人生は早かった。そんな短い人生の中で、皆、いろいろな事を遣ったのね。家光ちゃんだって、いろんな事を遣ったけど四十八歳で……綾はタイムスリップの辛さを、この時知ります。

静かに俯きながら歩く綾を二人は心配します。顔を見ると涙ぐんでいます。

「綾殿、如何いたしたのじゃ。歩きつかれたのじゃな。弘兵衛、少し休んだ方が良いのではないか。おぬしは歩くのが商売じゃ。いくら歩いても疲れんだろぅが綾殿は違う。もう少し気を利かさなければ。そもそも弘兵衛はな……。いかんいかん、拙者も三太夫に似てきたようじゃ。桑原クワバラ！」

急に三人は笑い出します。目に涙をためて笑う綾を見て二人は安心します。

愛宕山、愛宕神社と言えば、後に家光の御前で行なわれた「寛永三馬術」の一つ、曲垣平九郎で有名なところですよ。

愛宕山の麓に着いた頃には、三人ともお腹が空いています。自然、口数も少なくなります。綾は男坂を見上げます。空を飛んでいる時にこの山を見えています。その時は、

—— 山って言うけど、丘みたいだわ。

なんて考えていましたが、石段を見て怖気付きます。

「やーだっ！ こんなに急なのっ！ お腹も空いてるしー、綾、登れるかなー」

目を輝かせたのは二人であります。

「綾殿、拙者が背負ってあげよう」

「いや、弘兵衛の方が若くござる。私が背負いましょう」

などと大変であります。

「大丈夫っ！ 私だっって空を飛ぶために体を鍛えてるんだから。ただ、お腹が空いてるからね」

しかし、本当に急勾配です。粹がった二人は勇んで登り始めます。綾は、そんな二人を下から眺めながら登ります。

空から見ると、ちよつとした丘にしか見えませんが、一応、山と呼ばれるだけの事があります。周りを眺める余裕などありません。石段の幅もそれ程広くありませんし、石段と石段の高さも低いのです。石段を見ながら登らないと危ないのです。二人は競うように頂上に辿り付きます。頂上から綾に声援を送ります。綾も、やっと思り付きます。

まず、愛宕神社に参拝します。

この神社は、慶長八年九月の建立とされ京都の愛宕神に由来する火の神として信仰を集めたそうです。

綾は、参拝し終わって振り返ります。東の方角になります。綾はビックリします。

「ウワーツ！ 素晴らしい景色！ 東京湾がこんな近くにあるっ！ 凄いなー！ 帆掛け舟がイッパイ！ 遠くに見えるのは房総半島でしょう。」

山々が良く見えるわっ！ この景色って最高っ！」
それもそのはず。この時代は品川の付近まで海であります。愛宕山の頂上は江戸一番の景勝地であります。

二人は予想以上に綾が感激しますので、嬉しかったり驚いたりしていま

す。そして顔を見合わせませす。

「綾殿。今、トーキオーワンが、こんな近くに……とか申されたようですが、それは何ですか？」

—— いけない、またやっちゃった！

綾は、とっさに、

「とーとー、今日、湾の近くに來たって言ったんだけど。ねー、そんな事よりお昼にしましょうよっ！ この景色を眺めながらおにぎりを食べるなんて素敵っ！」

なんとも苦し紛れの返事であります。

江戸湾を眺めながら木陰の下、草の上に座り、おにぎりを開きます。三角の美味しそうなおにぎりや平べったいおにぎり。そして今にも崩れそうなおにぎり。

周りの木立からは五月蠅いほどの蝉の声。夏、真っ盛り。

「綾殿、そっちのおにぎりを頂けませんか。自分の作ったこの平らなおにぎりは、どうも雰囲気が出ません」

「駄目っ！」

「綾殿っ！ 拙者のおにぎりは、手で掴むと形がなくなってしまう。ほれっ、このように手のご飯粒だらけでござる。折角の景色が台無しになると思いませんか。これでは綾殿に申し訳がない。その形が良い方を取ってくださいらぬか」

「竹ちゃんの手のご飯粒だらけでも、この景色には影響なんて全くないわっ！ だから、これはあげない」

二人は渋々、自分の作ったおにぎりのようなものを食べます。

良い景色、歩き続けた軽い疲労感。食べてみれば結構、美味しい。

「いやー、旨いな、旨い旨い。拙者、おにぎりなど久しぶりでござる。子供のを思い出すのう」

「私もでござる。このオカカ入りのおにぎりは、ちよつと醤油が効きすぎ

てはいますが、オカカと醤油の美味しさがご飯に沁みて絶妙な味わいでござる。ところで、綾殿は空からこの山や江戸湾を見たと思いますが、空から見るとどんな感じなのですか」

「そうですね。例えて言えば箱庭かしら。お城も小さく見えて綺麗よ。江戸湾に浮かぶ舟なんか笹舟みたい。とても綺麗！」

「そうでござるか。羨ましいですな。武士には大トンビ禁止令がござるゆえ飛ぶ事は出来ませぬが、一度、そのハング・グライダーなるものを見てみたいと思っております。それに面白い名前ですな。何処かの方言でござるか？」

「弘兵衛さん、それは、ヒ・ミ・ツ！でも、今度、見せてあげる」

「本当でござるかっ！ 佐吉が作った大トンビは見せてもらいましたが、トンビにそっくりでした。しかし、竹弥殿、何故、禁止令が出たのですか。一部には、あの三太夫殿が、どうしても首を縦に振らなかつたのが原因と言われていますが」

「実はな、拙者が飛びたがっているためじゃ。綾殿に聞けば、結構、危険な事があると言う。拙者に何かあってはいかんと思っておるのじゃろう。三太夫は拙者一人が飛べないのは可哀想。では武士全員に禁止すればどうも考えたのじゃろうな。それに武家以外のものにも何か特権があっても良いではないか。まー、そうむくれるな」

時刻は八ツ。ノンビリとまどろんでおりましたが、そろそろ戻った方が良いでしょう。

「さて、ザーっと、ここに居りたいが帰るといたしますか……」

綾も心残りですが、三人は神社の脇にある茶屋で喉を潤し、帰ることにします。

石段は下りる方が怖いものです。上からは麓まで見通せますが、まるで垂直に立っているようです。足がすくんでしまいます。意気込んで上った

二人も、下りる時はゆっくりと慎重になります。冗談など言っていたら転げ落ちそうな感じですよ。綾は高いところにいるのは怖くはありませんが、この石段を下りるのは別物です。一歩々々、確かめるように足をだします。無言の三人。やっと麓に辿り付きます。

「いやー、大したものですよ。こんなに慎重になったのは久しぶりでござる。雨でも降っていたら怖くて動けませんな」

「そうか、普段強がりを言っている弘兵衛も怖かったか。しかし、この石段は何か人を引きつける雰囲気を持っている。雄々しいだけでなく繊細さも持っている。挑めつと言っているようでもあり、それを拒むようでもある。不思議な石段じゃな」

「綾殿、先ほどは時間を掛けて手を合わせていましたが、神社に何をお願いしたのですか」

「あらっ、そう言うことを乙女に聞いてはいけません。乙女の祈りは神聖なもの。心に秘めていた思いをお願いできるのは神様だけ。弘兵衛さんになんか言えませんかっ！」

弘兵衛、下を向いてしまいます。

——綾殿は、私の気持ちを判ってくれていない。相変わらず弘兵衛さんだ。しかも弘兵衛さんになんかと言う。やはり、ただの徒侍、ただの護衛役としか思っていないんだ……。

家光は弘兵衛の心の動きを察知します。ちょっと可哀想な気持ちにもなりますが、そこは男と男。心を寄せる一人の女性の気持ちを引きつけるには、征夷大將軍の地位も何の役にも立たない。しかも相手は綾です。征夷大將軍など屁とも思っていない。ある意味では、自分も弘兵衛も同じ立場。同情などしてられないのであります。

口数が少ないまま歩く三人が、山王付近に差し掛かった時、にわか上空が暗くなっていきました。夕立です。もの凄い夕立。雷も轟きます。

「夕立ですなっ！ これは凄い。あの大木の下で雨宿りいたしましょう。」

これは、しばし雨宿りですな」

大木の下で雨宿り。大粒の雨が地面を叩きます。そこ此処に水溜りが……。そして大きな水しぶきがあがります。尻をからげた町人たちが走りまです。女子たちは着物の裾を腰までたくし上げて走っています。中にはお尻を丸出しにして走るものもあります。当時は下着など付けませんので下半身丸見え。弘兵衛にとっては見慣れた風景ですが、綾と家光は、しばし目を広げて見やります。さすがの綾も無言。家光も気恥ずかしさから下を向いてしまいます。

小半時ほど経って、やっと夕立があがります。三人は、ずぶ濡れ。歩き回り体力が落ちたためか、綾は寒気を感じ体がブルブル震えてきます。

「私、風邪をひくかも知れない」

その場にうずくまっています。驚いたのは二人。弘兵衛が綾を背負い、長屋へと急ぎます。

七 お釈迦様は素敵なお方

—— どうしたんだろう……

綾は、訳が判らなかつた。

薄い霞かすみ のようなものが立ち込め、その向こうに家光の顔、三太夫の顔、そしてご隠居、弘兵衛たちの顔が……。そして普段と違い威厳さえ感じさせる満海和尚の顔が浮かんでいる。その顔が綾の周りをグルグルと廻り始めた。綾は熱にうなされていた。

急に満海和尚の顔が綾の目の前で止まった。その顔が段々と大きくなる。威厳のある顔つき。目をカーツと見開いている。怒っているのでも笑っているのでも、悲しんでいるのでもない。無表情と言えば無表情だが、何か

意思を持ったような表情で、じーっと綾を見つめている。すると顔が遠ざかり、和尚の全身が綾の目に映った。他の人たちは消えている。

見ていると和尚が手招きを始めた。こっちに来いと言っているようだ。

綾は、ゆっくりと立ち上がり和尚の方に歩きだした。

和尚の傍に行くと、和尚はくるっと後ろ向きになり右手を挙げた。すると、何処からともなく灰色の雲のようなものが降りてきた。

和尚は、ずっとその雲に乗った。振り返り、綾も乗れと手で合図する。

綾は操られるように、その雲に乗ってみた。足には柔らかいフワフワした感じが伝わった。和尚は、また後ろ向きになり斜め上の方を見あげた。そして、両方の腕を前に突き出し両腕を上げた。

すると、この雲が音もなく、すーっと動き出した。

—— 何処に行くんだらう？

雲は、物凄い速さで飛んでいく。

—— 凄い速さだわ。でも、感じるのは速さだけ……

それ以外の感覚は全くなかった。周りは真っ暗。太陽も、月も、星も瞬いてはいない。この雲の周辺だけが、ぼーっと明るくなっている。和尚は黙って同じ姿勢を保っている。

—— 空気があれば、抵抗を感じるはずなのに感じない。真空なのかしら。そんな事ないわ。だって、全然、苦しくないもの。

どれほどの時間、飛んだのだろうか、遠くの方に小さく光るものが見えてきた。

—— 和尚は、あそこに行くんだわ。

点にしか見えなかったその光るものが急激に大きくなっていく。

—— あーっ、大きな雲の塊ー！ 真っ白！ あー、ぶつかるーっ！

綾は目を閉じたが何の感触もなかった。目をあけると雲の中を飛んでいるようだった。全く何も見えない。

—— 雲の中を飛んでいるんだわ。そう言えば、以前、飛行機が雲海の中を飛んだけど、あの時の感じに似ている。でも、あの時は飛行機の窓が濡れてきたけど、今は全然濡れたりしない。雲じゃないのかしら。まだ飛んでいる。

和尚は相変わらず同じ恰好。両腕を上げたまま。雲が段々と明るくなっていくようだ。

—— 周りが明るくなってきたわ。何処かに着くのかしら。

和尚が両腕を下げ始めた。放物線を描くような感覚で乗っていた雲が、下がっていく。急に周りの雲が切れた。

「あーっ！」

綾は声を上げた。やたらと明るい空間が目の前に広がった。明るさ目目が慣れていないため何も見えない。

段々と目が慣れてきた。薄い明るく輝く霧のようなものが立ち込めている。る。

輝くような霧が立ち込める空間の中を雲は進んでいるようだ。和尚の後ろ姿は見える。和尚は両腕を水平にしていたが、その腕を下げていく。

和尚の両腕は、ピタツと両足に付けられた。と同時に、雲がピタツと止まった。

—— あれだけの速さで飛んでいたのにピタツと止まったわ。変ね、何の感覚もない。中学で慣性の法則っていうのを教わったけど……

綾は前方を見た。

「綺麗っ！」

綾は、キョロキョロと辺りを見渡した。

淡い桃色に輝く霧がかすかに立ちのぼっている。そして、向こうには輝く緑色の葉を茂らせた木々。地面には草の絨毯が、一面に敷き詰められているようだ。

—— 凄いわ。緑の園ね。ロマンティックだわ。

木々の間を、見た事もないような極彩色の鳥たちが飛び戯れている。少し離れたところにはキラキラと光を放つ川が、ゆったりと蛇行しながら流れている。魚だろうか、ピチャンと音を立てながら所々で跳ね上がっている。

和尚が乗っている雲から降りた。振り返り、降りると手で合図をしている。綾はピヨコンと飛び降りてみた。地面は、ちよつと固めのクツシヨンのようであった。桃色の霧のようなものが足の周りに漂っている。足を動かすと小さな渦を巻く。

—— 可愛いし、綺麗……

太陽のようなものはない。なのに、とても明るい。聞こえるのは鳥の声と、ゆっくりと流れる風が起す木々の葉っぱの擦れ合う音だけ。

和尚は、何も言わずに歩いていく。綾も後に付いて行く。

不思議な歩みだった。一步、足を進めると歩幅以上に進むのだ。

—— まるで、スケートで滑っているみたい。面白い！

綾は周りを眺めながら進んだが、和尚は何も言わない。綾は話をしたくなかった。

「クツ坊主、じゃない、満海和尚っ！ 何か話してよ。ずーっと黙りっぱなしじゃない。ねー、此処は何処？」

「綾、何処だと思う」

「そうね、雰囲気的には極楽浄土って感じね。当たったでしょう」

「ハハハー、極楽浄土か。ま、当らずとも遠からずじゃな」

「またー。一度で当てたから強がりなんか言っちゃって。でも何で綾を此処に連れてきたの」

「うーん、別に訳などはない。拙僧も、しょつちゆう来る事はできない。綾は風邪で寝ていたからな。たまには変わったところにと思ってたな」

「綺麗なところね。綾、気に入っちゃった。でも鳥や魚だけなのかな、住

んでいるのは」

「まあ、良いから付いて来なさい」

和尚は、なおも歩いていく。どれほど歩いただろうか、遠くの方に建物のようなものが見えてきた。建物の前には池がある。綾は思った。

—— ひよつとして、あの池には蓮の花か何かが咲いていたりして。もし、そうだったら在りがちなところね、此処は……

建物は、だんだん大きくなっていく。

—— あら、ヤード。本当に蓮の花が咲いてるわ。この蓮、大きくて綺麗。桃色が素敵。この建物、テレビで見たポルブドールとかアンコール・ワットに、なんだか恰好が似ている。金色と銀色の建物ね。石で出来てるのかしら……。もう少し柔らかい感じだけど。色がとても綺麗。金色や銀色ってキンキラキンで感じ悪いけど、ここは違うわ。淡く輝いているだけ。とても、おしとやか。造った人は、なかなかのセンスね。

「ねー、和尚。あの建物の中に入るの。綾、早く行ってみたいわ」

「良いから黙って付いて来なさい」

建物の正面に着いた。綾は外壁などを眺めている。

「綾っ！ 早く来なさいっ！」

和尚が大きな声をあげた。その声は木霊のように響き渡った。

「はーい！」

綾は走ってみようかと思った。右足を上げ、左足で強く踏み出そうとした途端、体はスーッと進み、和尚の脇に着いた。

—— 此処は便利ね。多分、何処に行くのにも今のような感じね。疲れなくて良いわ。

建物の中は、大きな広い空間であった。広い床には、やはり桃色の霧の

ようなものが漂っている。

—— 窓も灯りもないのに、外と同じように明るい。何で、こんなに明るいのかしら。ひよっとすると壁照明……。でも、そんなのって聞いた事がないわ。不思議ね。

広間の中央に来ると和尚は立ち止まった。

「和尚さま、此処には誰かが住んでるの？」

「誰かが住んでいるような、住んで居ないような……」

「何よそれ。まるで禅問答じゃない。私は尼さんになるつもりはありません。誰かが住んでいるのですかと聞いています」

「綾。そうムキになるな。誰も居ないように見えるが、此処には誰もが居るのじゃ」

「またー、余計、判らなくなるじゃない。どう言うこと？」

「綾、会いたい人はいるか、言ってみなさい。その人に会うことが出来る場所じゃ」

「そんなー。急に会いたい人はって言われても困るわ。ひよっとして会いたい人がいれば、誰にでも会えるの」

「そうじゃ。会える」

「へー、凄いな。じゃーねえ、絶対に会えっこないと思ってる人を言うわ。和尚、後で泣きべそなんてかかないでよね」

「これっ、拙僧は、これでも仏に仕える身じゃ。泣きべそなどかかん」

「和尚、言うわよ。此処の雰囲気から考えても、やはり、この人しか居ないわ。お釈迦様！」

「やはり、そうか。拙僧の予想が当たった。意外と単純だな、綾は」

「ずるいわ。人が言った後にそんなこと言うなんて。さー、どうしますか、お釈迦様に会えるのですかっ」

なんて戯言を言っていると、広間の奥にある台座のようなところに濃い雲がモクモクと立ち込めてきた。

「わーッ、凄い！ 金色に輝いている雲っ！ 和尚様、見てっ！」
和尚は合掌したまま動かない。

その雲は天井にまで届き動きを止めた。雲が徐々に薄れていく。

「あーっ！」

綾は絶句してしまった。雲が消えた後には一人の痩せた、いや痩せ細った男が座禅を組んでいた。まるで枯れ木のようにである。

綾はビククリしたが、前に見た事があるように思った。

—— お釈迦様が断食の修行をしていた時の姿だわ。以前、そんな仏像の写真を見た事がある。本当に、お釈迦様なのかしら……

綾は、あっけにとられ見つめていた。

するとこの男は、ゆっくりと体を動かし始めた。

—— あれーっ、だんだん太っていく。

体を動かすたびに枯れ木のようなだった体に肉が付いていく。いや、綾が言うように太っていくのである。普通の体つきになったころ、今度は立ち上がり始めた。

「あーッ！ アーッ！」

綾は腰を抜かすほど驚いてしまった。その男が直立不動の姿勢をとった時、上背は天井まで届いていた。

—— お、大きい！

綾は顔を見ようと顔を上げたが、真上を向かなければならなかった。

その顔は奈良や鎌倉の大仏様よりも、昔、美術の時間に見たガンダーラの仏像の写真に似ていた。目は閉じている。

—— この人、素敵な顔をしている。

この男は、ゆっくりと台座から降り始めた。こっちに歩いてくる。さすがの綾も怖くなってしまった。気付くと和尚の衣の裾を掴んでいる。台座から綾が立っているところまで二十メートルほどあった。

その男は近づくとつれ、小さくなっていった。綾の三メートルほど前に来て立ち止まった。背丈は二メートルほどであろうか。

—— 遠くに居たときは数十メートルの大きさ。近づいたら二メートル。これって遠近法の逆だわ。

綾は意外と度胸が据わっている。きちんと状況を観察している。和尚を見ると、先ほどと同じように目を瞑り合掌している。

この男は目を開き綾を見つめた。

「わーっ！」

綾は思わず声を上げてしまった。あくまでも澄んだその目。青とも緑とも言えないその目の光は、綾を包み込むような広がりを持っていた。綾は魅入られたように、その目を見つめていた。

僅かに、ほんの微かだが、その目が微笑んだように見えた。

綾の心臓が、ドキン！ と鳴った。

「綾か」

その男が口を開いた。その声は静かだが良く響き渡るバリトン。綾の心臓が、またドキンと鳴った。

「は、はい」

綾の頭の中は真っ白だった。

—— どうしよう。どうすれば良いのかしら。あれっ！ この人、日本語を喋った。

「戸惑っているようだね。これは言葉ではない。これは意思だ。此処では言葉はいらぬ。意思を持って相手に伝わる。でも不精をしてはいけない。意思を持たなければ伝わらない」

「わ、判りました。ところで、貴方は誰ですか」

「あれーっ！ 私に会いたかったのではないのですか」

「じゃー、本当にお釈迦様なんだ。ゴメン」

キツカケとは些細なことである。綾は急に打ち解けてしまった。しかし、会いたいたと言ったものの、これと言って話すことはない。

でも、ちょうど良い、日頃、考えている事を聞いてみる事にした。

「お釈迦さま。私はタイムスリップしたんですけど、何で私がそうなったのか。それに地球にも寿命があるらしいけど、それらについて教えてくださいませんか」

「そうか。綾は、あの世でタイムスリップを経験しているのだったな。綾。今、私は、あの世と言ったが、あの世の人間は此処をあの世と言っている。しかし、此処では、此処がこの世で、あの世があの世なのだ。つまり、あの世では、あの世がこの世で、此処があの世……。まー、良い。要するに逆なのだ。綾、判るか」

「お釈迦様って、説法が上手だったんですよ。でも、今の説明は下手ね。最後の一言で良かったのよ。逆なんだ、で……」

「そうか。最近、余り説法をしていないからな」

お釈迦様は、急に親しみのこもった話し方になった。

「何故、タイムスリップをしたか。何故、地球にも寿命があるのか。綾、これがテーマだったな。綾は、双曲円錐体状スパイラル理論を知っているな。あれは、私の弟子が書いた理論だ。地球の寿命、地球上で営まれる歴史、世の中の変化のスピード、タイムスリップの可能性などについて書いてある。あの稜線を滑り落ちたり押し上げられたりする。これがタイムスリップだ。綾にとって重要なのは、何故、綾が、である事は判っている。しかし、折角こうして会えたのだ、答えを言う前に、いろいろ話してみたいが、良いか」

「そうね。此処は、綺麗なところだし……、それに何だか良い香りがして

いる。これは香木を焚いてるのかしら。香木には伽羅とか沈香があるって聞いたけど、どれも高価なものよね。お釈迦様、お金、掛かったでしょう」「これこれ、何を言い出すのかと思つたら……。此処にはお金の概念などはない。それにこの香りは香木を焚いたのではない。この霧が自然に持っている香りだ。安上がりで良い。いや、いかんいかん。綾につられてしまった」

何とお釈迦様が頭を搔いた。

「綾、生あるものは総て滅する。つまり有限なのだ。地球も同じだ。地球は命ある生き物だ。その上に数多の生命が存在している。これは人間を地球に置き換えてみれば判ることだ。綾の体の中にも数多あまたの生き物が居る。そして、それらの生き物は生まれ、そして滅する。綾、輪廻転生と言う言葉を知っているか」

「聞いた事があるわ。人間は死んでも、いずれ何かの生き物に生まれ変わるっていう事でしょう」

「おー、良く知っているな。私は、だから生きている間には善いことをしなければならぬ。さすれば、次に生を受けた時に幸福になれると教えた。しかしな、この教えは正しいのだが輪廻転生の本来の仕組みは違う。総ては有限だ。地球上の生命の数も有限なのだよ。その命が、あの世で生を営む。そして、また、この世に戻ってくる。あの世では、この世に来る事を、あの世に行くと言うが、あの世から、この世に戻る事なのだ。あの世、この世とややこしいが、冷静に考えれば、どうって事はない。綾、判るか」「「いちいち確認しなくても判ります。お釈迦様の方が混乱しているんじゃない。少し冷静になった方が良いわよ」

「おー、そうか。ありがとよ」

お釈迦様が、このような言葉を使うのだろうか……

「先程、満海が此処には誰かが住んでいるような、住んで居ないようなと言ったが、あの世から戻った命が此処に居るから、あのように言ったのだ。判るか、綾」

「またー、判ってます。お釈迦様って、ちよつとくどいわよ」

「済まん済まん。私の口癖でな。良く言うのではないか、無くて七癖……」

「あれー、随分、通俗的な言葉を使うのね。お釈迦様って神様なのに」

「綾、私は神ではない。元は人間だし、そもそも神などが居るのかどうかも知らない」

「でも、皆、お釈迦様を拜むじゃない。何で？」

「私は、人間として人間の在り方を考えただけだ。何故、人間とは苦しむとか苛立ちを持ち、悩むのかと。綾、何故、悩むのかと悩む。これは面白い表現だとは思わないか」

「別にー。だって、私も、何故こんな些細な事で私は悩むのかと悩んだ事あるもん」

「そうか。私と同じだな。私は、ある日、すーっと心が軽くなったのに気付いた。そうか、欲ほするからだ。あれやこれや欲しいと思うから悩むのだ。何も要らない、在るがままで良いではないか、そうすれば悩みなどなくなるとな。人間も自然界のひとつの存在でしかない。自然の大きな流れの中のたった一つの存在。周りの人間も皆同じだ。だがな、欲したり求める心は大切な事だ。しかし限度がある。己を自然界のたった一つの存在と認めた上で、自分に対し何かを欲し、求めるといふ心は貴重なものだ。この心は捨ててはいけない。ところが周りに求め出した時に悩みが始まる。綾、わか……、綾は若いな」

「あら、上手く誤魔化しちゃったわねー」

「私は、自分が経験した事を周りに話したただけだ。大勢が話を聞きたいと集まってきた。自分が悩みから開放され、ゆったりした気持ちになったのだ、皆に話したよ。私が此処に来た後、仏像と称したものを造り、拜むようになったらしいが、私には預かり知らぬことだ」

「そうなんだ。でも病気などで苦しんだりする人もいるけど……」

「綾、総ては有限だ。地球上に存在するものは病気も含め有限だ。その有限なものが入り乱れ、形を作っている。人間が病気になるのは、その人間

と病気が出会ってしまったからだ。誰が、そんな出会いをさせてしまったのか。これは誰にも判らないことだ。それを、とやかく言っても、どうしようも無いのだよ。自然界の流れだからな。受け入れるのだ、総てを。あの世で苦しんだとしても、また生まれ変わる。ところで…… 綾、外を散歩しないか」

二人は外に出た。和尚は相変わらず合掌したまま後に続いた。

綺麗な蓮の花が咲く在りがちな風景。池の周りを歩きながら会話が進められた。

「そう言えば、お釈迦様も人間だったんでしよう。ずーっと此処にいるようだけど……、何かに生まれ変わらないの」

「理由は良く判らないのだが、私は、このままだ。綾、生まれ変わると言ってもな、何から何へと決めるのは結構、面倒なのだよ。バランスがな。地球上には絶滅した種もある。地球環境の変化についていけなくなった種は、残念だが消える以外にないのだ。地球環境をいじくりだしたのは人間だ。誰が人間を作り出したのかは知らないが。最近、やっと地球を大切にとか言っているが、気付くのが遅い。今の地球は生き物にとって適さない環境になっている。適応できるのは人間だけだ。生まれ変りのコントロールに、私も絡んでいるが、有限な命を割り振る場合、この環境に適応できる人間に仕方なく割り当てている。他の生き物に割り振っても、すぐに此処に戻って来てしまうからな」

「へー、人口が増える理由って、そういうことだったんだ」

「しかしな、後五十億年ほどで地球の寿命も終わる。母体となる地球が滅するのだ。その時には総ての生が消滅する。人間の生が終われば、体の中にいる数多の生がなくなる事と同じだ」

「そうか、インフラが消滅すれば、その上に存在するものも消滅せざるを得ないんだ」

「インフラか。最近流行っている言葉だね。満海には判らんだろうが」

満海和尚は同じ姿勢でいる。聞いているのか聞いていないのか……。

「綾、地球の命も有限だ。どうせ消滅するのなら、どうなっても良いではないかと考えることもできる。しかし、この考え方は間違っている。有限だからこそ、その有限な時間をまっとうすることに意味がある。これが自然界の摂理なのだ。もともと地球の寿命が尽きる前に、この環境悪化が進み生命が消滅してしまうかも知れないが……。それが判っていても私にはどうする事もできない」

彫の深いお釈迦様の顔に陰りが見えた。悟りを開いたとはいえ、いまだ悩めるお釈迦様がそこに居た。

綾は、悩めるお釈迦様の横顔を見て軽率にも言ってしまった。

「お釈迦様って素敵ね」

「生まれてこのかた、そうだな、数えてみれば二千五百年ほど経つが、そんな事を言われたのは初めてだ。もともと出家する前は結構もてたが……いやいや、そんな事はどうでも良い」

「さっきから、総ては有限だ有限だと言ってるけど宇宙は無限なんじゃないの」

「宇宙か……。綾、宇宙も有限だ。ただそれを知る術を知らないだけだよ。学者たちはビッグバン以降、宇宙は限りなく膨張しているとか言っているが……。しかし、宇宙の誕生をビッグバンだとすれば、これは有限を意味していることになる。始まりがあったのだからね。では、ビッグバンが起こる前は、どうだったのか、これについては誰も仮説すら立てられない。であれば宇宙は無限に膨張するとは言えない。正しい言い方は、宇宙は、今、膨張しているになる。無限にとは決して言えない」

「成る程ね。でも何かあるんじゃない、無限なものか……」

「綾もくだいな。どうしても無限なものを捜したいようだな。そうだなー、私にも良く判らないのだが、ひよっとすると時の流れかな。時の流れとは思議なものだとは思わないか。既に、時の流れという直線か曲線があったてその上を辿っているのか、または、何も無いところに一刻一刻を刻んで

いるのか」

「やだー、頭が変になっちゃうわ」

「例の理論からいえば、少なくとも地球が辿る道は、既に出来上がっている事になる。だから過去にスリップしたり、未来にスリップしたりする。地球も宇宙の中のほんの小さな存在だ。地球の誕生から消滅までのシナリオは存在することになる」

「そうね。そのシナリオって……、お釈迦様、知ってるの」

「綾、私は、粗筋は知っている。でも細かい部分までは読んでいない」

「へー、そうなんだ。あつ、思い出した。で、私のことは、どうなの。何故、私が……」

「ハハハ。思い出したか。実は答えたくないんだ」

「あー、知らないんだ。お釈迦様だって知らない事があっても不思議じゃないものね」

「そうではない。答えにならないのだよ」

「どう言うこと？」

「地球自身も含め、地球上に存在するものに完全、完璧なものはない。完全、完璧とは概念の世界でしか存在しない。例えば、綾は点とか線を知ってるね。点とは位置を意味するものであり、線とは点と点を結んだもの。つまり面積はないんだ。本当は見えないものだ。でも、それでは物事が進まないの、あのように描いている。見えているのは仮の姿でしかない」

「ちよつと待つてよ。お釈迦様は何を話そうとしているの。綾、判んなー」

「そんな子供じみた話し方をするものではありません。もう大人なんだから」

「あれー、母親みたいな事を言ってる」

「完全、完璧なるものは、概念の世界にしか存在しないとすれば、現実の世界は不完全なものとしか言えない。実際、存在するものに完全なものはない。あの双曲円錐体状スパイラルも概念としては完璧だが、現実的には

全く不完全としかいえない。つまり、そこいらじゆうに欠陥、穴がある。

そこに足を踏み入れるとタイムスリップが発生する」

「まるで落とし穴みたいね」

「では、誰がどういう時に足を突っ込んでしまうか……。これは乱数と同じで規則性はない。今回は綾だったが、綾でなくてはいけないという理由はない。たまたま綾だったと言うことになる。しかし、綾は行ったり来たりするキーワードを知った。良く気付いたと思う。キーワードを使えば行き来できると言うのは、タイムスリップ被験者の特権のようなもの。被験者、全員が幸せを感じたとは言えないからね。一つくらい特権があっても良い。答えになったかな」

「やっぱり答えになっていないわ。でも……。そう言うことと納得せざるを得ないのね」

「その通り。綾は意外と物分りが良いようだ。ところで被験者として幸せと言えるかな。それとも辛いのかな」

「一言で言えば、幸せ。でも百パーセント幸せじゃない」

「どういうところが幸せじゃないのかな」

「だって、家光ちゃんがいっつ死ぬかが判っているんだもの。そんな事知りたくなかった。私、過去にタイムスリップするにしても歴史上の人物と知り合いになっちゃ駄目、って思ったわ」

「なるほど。その気持ちは私にも理解できる」

満海和尚が目を開けた。

「お釈迦様、随分と長い時間でしたが……」

「和尚、たまには良いではないか。このような会話は、そうしょっちゅう出来るものではない。綾、綾は二十一世紀と江戸時代、そしてこの世を知った。果たしてどの時代が本当の綾の時代なのか。しっかりと見た方が良い」

三人は建物の中へと戻った。

広間の中央にお釈迦様は立った。そして台座に向かって歩き出した。体は大きくなっていく。台座に着くと天井までの高さになった。しかし、今度は目を開いている。そして口を開いた。

「綾、いずれまた会う機会があるだろう。今日は楽しかったぞ……」

建物中に響き渡る声。いやその声は何処まで届いたのであろうか、大音響であった。

気付くとお釈迦様は、ふーっと消えていた。

綾は、ただ呆然とその場にたたずんでいた。

——お釈迦様って素敵な方。また、会いたい……

「綾さん、綾さん」

「綾っ！」

「綾殿ーっ！」

綾は、ふっと頭を振ってみた。すると、急に目の前に透明な空気が流れたような気がした。顔を動かしてみた。あれ？ 私、寝ている。目を動かすと、周りにはご隠居、家光、弘兵衛たちの顔が……

「あー、良かった。綾さんが目を覚ましました」

興奮した弘兵衛の声だ。満海和尚の顔は見えない。

「満海和尚は……」

「和尚……。和尚は寺じや」

「じゃー、此処には居なかつたんだ……。私、倒れたの」

ご隠居が答えた。

「風邪じや。酷い熱だった」

「そうだったんだ。どの位寝てたのかしら」

「長屋に寝かせてから、まだほんの少ししか経っていない。弘兵衛の背中、うわ言を言っていたが……」

家光も、ホツとした表情になった。綾は、もう一度、皆の顔を見た。緊張した表情だが安堵の面持ち。皆に心配掛けたんだ。でも、ほんの少しの

時間？

—— お釈迦様とは随分長く話したと思ったけど……。満海和尚に会った方が良いかな……。

綾は、満海和尚を訪ねることにした。

現実の事ではないのかも知れない。しかし余りにもリアルな体験であった。目を閉じると今でもあの光景が甦ってくる。確かに満海和尚が導いてくれた世界だ。お釈迦様のお姿は、今までお寺や美術館、写真で見た姿にそっくりだった。しかし、その内面は一人の人間であった。一人の人間が悩み苦しんだ末に掴んだ考えや教えが二千年数百年もの間、大勢の人間に影響を与えている。お釈迦様に対する畏敬の念もさることながら、一人の人間が成し得る可能性の大きさに驚いていた。

「満海和尚っ！ 和尚様ーッ！」

綾は玄関に入ると大声で呼んだ。返事はない。大声で叫んでみた。

「クソ坊主は居ますかーッ！」

「おー！ 綾かっ！ 厨房におるっ！ 構わんから、入って来い！」

—— 満海和尚と呼んでも返事しなかったくせにクソ坊主と呼んだら返事している。やはり、クソ坊主と呼んだ方が通じるのかな。

厨房に行くと、両足ですり鉢を押さえ味噌を搗っている。

—— あらまー、普通は小坊主がやる事なのに。一人暮らしも大変ね。

綾は、和尚の前に座った。

「この前は、どうも……」

「この前？ おーおー水虫の時じゃな。そう言えば、綾は熱で失神したと聞いたが今は大丈夫か」

「ええ、一時的なことだったみたい。皆に心配掛けちゃったわ。ところで和尚、いろいろとありがとうございます。あの時は助かったよ」

「はて、お礼を言うのは拙僧の方じゃ。あの時は助かったよ」

「でも、お釈迦様って素敵な方ね」

「それはそうじゃ。ご自分のお考えを皆に説いた。そのお考えが多くの人間の心を安らかなものになっている」

「もう何回も、お会いしているの？」

「えっ！ 拙僧がお釈迦様にお会いする？ 綾、そのような事は願っても出来ぬ事。功德を重ねれば、拙僧も極楽に行けるかも知れんが……。一度で良い。お会いしたいものじゃ」

和尚は味噌を播る手を休め、遠くを見遣る目つきをした。綾には、とぼけているようには見えない。

「極楽浄土って、緑が多く綺麗な川が流れている。綺麗な建物があつて、池には蓮の花が咲いている……。そこではお釈迦様にもお会いできる。微かに甘い香りが漂っている」

「拙僧も、そのように聞いておる。しかし、綾、今日はどうしたのだ。急に、お釈迦様とか極楽浄土の話をして。疲れがたまっているのではないか……」

やはり、とぼけているようには見えない。

綾は体験したことを話すのは止めた。しかし、和尚が導いてくれたとの確信は強く持っている。いつの日か和尚は話してくれるはずだ。

綾は、お釈迦様が言った、どの時代が本当の自分の時代なのかを考えていた。

(了)

譚
綴

「
トンビにアブラゲ
」

二〇〇二年十二月十四日

二〇〇六年三月二十日(改)

編集・発行者 エムツー・プラデオ

三
谷
弘

禁無断転載・複写

M²plaDeO
Planning & Design Office

Copyright© H.Mitani